寵姫のおしごと

小択出新都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
寵姫のおしごと

【Ｎコード】
Ｎ０３２４Ｏ

【作者名】
小択出新都

【あらすじ】
今別の後宮ものを書いているけど、今のプロットじゃお茶会とかできなくて、とても後宮ものとはいえない状況で涙目だけど、書いたからには最後まで書かなきゃいけないから努力していくつもりだけど、この作品でちょっとガス抜きさせてね。な作品。

ガールズラブ的な表現があります。注意。
下品な表現が多数あります。注意。
ガールズラブ的な表現はありますが、ノーマルカプもあります。注

意。

（更新再開ですが、スローペース&不定期です。）

1羽

この世界を大きな危機が襲った。
3大大国が一つ魔道大国ローレシアン。
賢王とかつては呼ばれしグレアムは、禁断のグリモアの紐を解き悪魔と契約を結んだ。
悪魔の軍勢を牽きいし狂王は、世界を地獄に染めようとした。
魔の力を得たローレシアンの力は強大だった。
多くのものがただ逃げ惑い、明日に絶望した。
だが、立ち上がるものたちがいた。
戦士の大国アルザルドの王子クオン、聖者の大国ラマーナの聖姫レナス。
そしてその仲間たち。
3年に及ぶ戦いの果て、終に彼らは闇を討ち果たした。
その戦いの果て、思いを通わせあったクオン王子とレナス姫は結ばれた。
世界の民がその結婚を祝福し、それぞれの国の王と女王から王位を受けついだ王子と姫は、それをまとめひとつの大きな国を作り出した。
人類の希望の象徴、光の国アマテリア。
王になったクオンと王妃になったレナスは、戦いのときと同じように互いを支え合いこの国を支えた。
その周りにはかつての仲間たちも集まってきた。
民たちはそれを見て、この国の永遠の繁栄を予感した。
だがしかし、2年後アマテリアに一筋の暗雲が漂いはじめていた。
クオンとレナスの仲睦まじさは、国民の誰もが知っていた。
だがそれに反して、二人の間に子供は出来ていなかった。
そんな折、公妾を迎えるという噂がたったのだ。
国民たちはその噂を否定した。

クオンとレナス、長い戦いを乗り越え、互いを愛し合い、この国の平和の象徴とも言える二人の仲を引き裂くものが現れるとは思えなかった。

だが一ヵ月後、アマテリアは激震する。

クオンとレナスが寵姫を迎えると正式なお触れがあったのだ。

寵姫の名はマリアベル。

国民たちは混乱し、多くの女性はレナスの立場を思いやり涙をし、男たちは二人の仲に入り込むのはどんな悪女かとうわさしあった。

そしてこの国の未来と国王夫妻の平穏を祈った。

2羽

マリアベルは紅茶を一口啜った。
口の中にほのかな苦味と共に、上品な甘い香りが広がっていく。
「美味しい…。」
マリアベルは純粋に感心した。これほど美味しい紅茶は飲んだことなかった。
「そうだろうそうだろう。マリアのためにわざわざクルーシェから取り寄せたんだ。」
笑顔で言うのはこの国の王クオンだ。さらさらの紫銀の髪に野生的に光る赤い瞳、容貌はこの世のものとは思えないほど整っていて、背の高さと長く戦いの中におかれ引き締まった肉体、世のすべての女性が魅了されるほどの美男子だ。
「わざわざそんな遠くから…。」
マリアベルは半分呆れながら言ってしまう。
クルーシェはここから海二つほど隔てた大陸にある小国だ。輸送費だけでどれだけの金貨が費やされたことだろう。
「マリアのためになら、俺は天空城にある竜玉すら手に入れて見せるよ。」
「いえ、いりません。」
この人が言うと洒落にならないので、マリアベルは即効で断る。
「ふふ、マリアは無欲だね。」
何が楽しいのかわからないが、陛下はいちいち満面の笑みだ。
テーブルに置いてあるマリアベルの手に、手を重ねてきてウインクをしてくる。
後宮の庭でのお茶会というにはささやかな、陛下と二人っきりの時間。後宮の庭は一流の庭師により整えられていて、色とりどりの花々や桃や桜の木々が咲き誇っている。
陛下の奇妙な行動を無視して、マリアベルは空を見上げて思った。

（こう、穏やかな日々なら悪くない。）
そしてクオンの手の感触が無くなったことに気づいて視線を元に戻すと、彼の姿はなかった。ついでに言うと、白いテーブルは綺麗な断面で切断され、椅子が砕けたと思われる粉塵が風に巻かれ飛び去っていった。
右を向くと後宮の壁にぽっかりと穴が開いているのが見えた。
マリアベルはテーブルが倒れる前にお茶のポットを確保する。
（もったいない。もったいない。本当に美味しかったし。）
「マリアー、そろそろ買い物行きましょー。」
声のする方を向くと、美しい少女が聖母のような微笑を讃え手を振りながらこちらへ走ってくる。金色の緩く巻きのかかった髪に、蒼い瞳、透き通るような白い肌の天使みたいな美少女。
「レナスさま…。」
その少女はこの国の王妃レナスだった。
「今日はお忍びで買い物行くって約束だったでしょ。私待ちきれなくなっちゃって。」
駆け寄ってきてこの上ない笑顔で話す美少女に、マリアベルは失礼にならない程度ににらみつけて言う。
「さっき何をされたんですか？」
さっきとはテーブルが半分に切断され吹っ飛んで、椅子が粉々になり、後宮の壁に修繕の必要性が生じ、ついでに陛下が行方不明になったことだ。
「えへへ、ばれちゃった？ちょっと破壊系の魔法の演習をちょびっと」
頭に手を置き、下をぺろっと出して悪びれなくいう王妃殿下。
マリアベルは何かをあきらめるようにため息をつき。
「今度はテーブル巻き込まないようにしてくださいね。」
そう言った。
「もう、マリア怒っちゃやー。でも怒ったマリアもかわいい！」
ぐりぐりぐり、抱きついてじゃれついてくるレナスに、マリアベ

ルはなんとか両腕に持ったお茶をこぼさないようにがんばる。
「お、怒ってませんから、どいてください。お茶かかりますよ。」
しばらく擦り付いて満足したのか、レナスは笑顔を増してマリアベルから離れる。
「それじゃー買い物いこー！マリアの衣装も用意してきたの！」
そう言ってレナスはどこからか、服を取り出す。
それは黒い上等の生地で作られたドレスだったが…。
「なんか尻尾がついてるんですけど…。」
マリアベルは遠慮がちに突っ込んだ。
「ふふ、大丈夫。ちゃんと猫耳カチューシャとくび…チョーカーも用意したから。」
「ぜんぜん大丈夫じゃないです！しかも首輪って言いかけたし！」
次は即効で突っ込む。
久しぶりに外出できるのはうれしいが、そんな格好だったらごめんこうむる。
「大丈夫絶対似合うわ！」
満面の笑顔で猫耳衣装一式を押し付けてくる聖姫に、屈辱死させられることを予感したとき。
シュッ
突如、レナスの手にあった衣装がばらばらになって飛び散る。
「やれやれ、マリアが嫌がってるだろう。おまえってやつはおしつけがましい。」
後宮の瓦礫を蹴飛ばしながら、優雅に登場したのは結構前にレナスの魔法で吹き飛ばされたクオンだった。あくまで優雅に髪を掻き分けながら、左手に持つのは数多の悪魔を葬りし聖剣レガードだ。
「マリアにもっとも似合う衣装を着せるのは、神に仕える聖女として受けた天命よ。野蛮な蛮国出身のあなたにはわからないでしょうけど。」
レナスの右手に生じた限りなく白い光の球は、爆熱系高位魔法メガトン。一撃でちょっとした砦なら消し飛ばせる。

そのまま二人はじりじりたち位置を替えながら互いの間合いを計り始める。
「ふん、天啓とは笑わせてくれる。大体、そんな衣装でマリアの魅力が引き出せるものか。マリアに似合うのは、そう…例えばバニーガールだ！黒いタイツから覗く引きこもり気味で焼けてない彼女の白い肌。かわいいウサミミがチャームポイント！これなら彼女もきっと喜ぶ！」
いや、絶対着ないし喜ばない。
「やだやだやだ、これだから男ってのは欲望丸出しで反吐が出るわ！マリアのやわらかい肌が晒されるのは、私のベッドの上だけでいいのよ！」
いえ、よくありません。
心の中で突っ込みをしてる間に、聖剣レガードの封印が解かれその存在を神剣へと昇華する。赤い神気のオーラをまとい強大な力に大気が震えだす。レナスの光の球はさらに輝きを増しメガトンから二段階高位のアルトランへと変貌する。どちらも最終決戦において悪魔の軍勢数百を一撃で葬ったとされる伝説の攻撃だ。
たぶん二つがぶつかり合ったら、王都ぐらい軽く消滅するだろう。
ゴゴゴゴゴゴゴゴ
まるで嵐のような風が美しい後宮の木々を波立てる。
ふと、マリアベルは背後に気配を感じて振り向いた。
誰だかは分かっていたが、振り向くとやっぱり思ったとおりの人だった。
銀色の髪に、身長2メートルはあろうかという美丈夫。ただその目はいつも寝てるのか起きているのかわからないほど弧を描いたまま細められている。狂王との戦いにおいて、クオンとレナスを支えた最大の腹心にして、現在はアマテリアの宰相を務める切れ者の男カルーア。
カルーアはマリアベルを見ると、やれやれといった感じで両手を上げると、口元をいやらしくねじ曲げた。いつ見てもいやな表情だ

とマリアベルはげんなりする。
「さすが傾国の美女といったところですな、マリアベルさま。お忍びで買い物に行くだけで王都壊滅の危機とはすばらしい。王都に勤めるものの苦労も、その広い心で考えていただけるとありがたく存じますよー。」
本当の危機なのだが、この男に言われるとむしろ滅びろと思ってしまうのは罪ではないと思いたい。あと傾国の美女っていうのは厭味か。そういうのはレナスやその側近の美女を指し表すものだ。
「今回についても、私の責任はいっぺんたりともないとおもうんですけど…。ふたりが買ってにやってることだし…。」
マリアベルはさすがに憮然として言い返す。
ガシッ
しかしそんな生半可な反論が通じる相手ではないのはわかっていたことだ。肩をつかまれ、無表情な笑顔を間近で見せられながら言われる。
「もはや責任とか言うレベルの話ではないんですよー。世界最大の大国ｏｒ人類そのものが滅びる危機なんですよ？わかってますー？」
ならいちいち嫌味言うな。と突っ込みたかったが、怖いので突っ込めない。
「でも、どう止めればいいんですか…。どっちかの味方したら、もっと事態が悪化しそうだし。」
正直先に手を出したレナスが今回は悪いと思うが、それでレナスが納得するとは思えない。ついでに二人の意見にはどちらも賛成できない。
「私に名案があります。」
そう言って、カルーアはぱっと後ろから何かを取り出した。
「それって…。」
宰相が取り出したものを見たマリアベルノ顔が歪む。
「これを…ごにょごにょして…ごにょごにょ。」
耳打ちされた言葉に。

「いやです。」
即効断る。
「あーあー。いいんですよ。いいんですー。かまいませんよー。あー、今日この日をもって輝かしいアマテリアの輝かしい歴史は終焉を迎えます。悲しいことだけど仕方ありませんよねー。」
わざとらしい演技で頭を抱え、ぜんぜん悲しくなさそうにのた打ち回るカルーア。マリアベルは頭痛を感じた。
「わかりました！やればいいんでしょうやれば！」
「おねがいします。」
ぱっと立ち上がり衣装を渡してくるカルーアに絶望的な気持ちになる。
ぱちっ、と指をならすと侍女軍団がやってきて布で私を覆ってくれる。
「早く着替えてくださいよー。そんなに時間ありませんから。」
「わかってます！」
やけくそ気味に今まで来ていたドレスを脱ぎ捨て、渡された衣装をまとう。
着替え終わるとささっと服を回収して侍女軍団が立ち去っていく。その無常なプロフィッショナルさが少し恨めしい。
「さあ、まもなく激突ですよ。寵姫さまお願いします。」
なぜかマイク片手に盛り上げる感じで言うカルーアをひと睨みして、王と王妃のほうをむく。二人の距離は既に1メートル、なにやら覚醒を遂げたらしく、剣のオーラが金色に、レナスのほうは光輪を纏っている。たぶんあれがぶつかり合ったらこの大陸ぐらい軽く吹っ飛ぶかもしれない。超迷惑だ。
「クオンさま！レナスさま！」
マリアベルの声に二人が振り向く。二人の目は見開かれ、こちらを凝視する、その視線に顔が熱くなるのを感じる。だがここで止まるわけにはいかない。世界のためとかそんなもののために。
「け、喧嘩しちゃいやにゃん。仲良しが一番だにゃん？三人で買い

物いくにゃん！悪い子は置いていっちゃうだにゃん！」
死にたい。この世界から消えうせてしまいたい。マリアベルは限りなくそう思った。
今のマリアベルは、レナスが用意したのと同じ猫耳衣装を着ていた。何故かカルーアが持っていたのだ。しかもところどころマイナーチェンジされ、スカートが短く、臍が出ていて、肩まで露出されている。これを身に着けているところを見られているマリアはひたすら精神ダメージを受けていた。
「……。」
二人はこちらをじっと見て固まっている。
もう家に帰っていいですかと宰相に送った視線に返されたのは、ダメ押ししろのサイン。
これ以上何をしろと。っと返すと、宰相が世にも奇妙なポーズを取る。
それをやれと…。
「二人が喧嘩すると私泣いちゃうニャン。」
首を少し横に傾け、俯き気味の上目遣いになり、目に涙を溜め（嘘泣き）、手を曲げながら頭の上にやり、黒い柔らかいグローブに包まれた握りこぶしを前に曲げる。
私はいったい何をやってるんだろう。遠く離れた故郷に住む弟を思い浮かべる。伯爵家の婿養子になった弟。元気でやっているか弟。
「さすがマリアベルさま、ばついちでそこまで出来る人はいません。」
目頭を押さえ天を仰ぎながら言う宰相。空虚な拍手がやたらひびく。
うるさい！ばついちは関係ないだろう！
「わ…私は悪くないわよ…。」
「くっ…泣き顔も魅力的だが…泣かれては…。」
二人は魔法と剣はおさめてくれたが、どちらも憮然として視線を合わせようとはしない。

マリアベルは仕方ないなぁとため息をひとつつくと、二人に歩み寄り手をその手を取った。
「二人とも買い物行きましょう。」
「「マリア…」」
二人の声が重なる。妙なところで気の合う二人に、マリアは少し隠れて笑ってしまう。
「マリア…その格好恥ずかしくないの？」
言い方にピキッとくるが、嫌じゃないの？といい間違えたのだと思って気持ちを収める。
「マリア…パンツも黒なのか？」
蹴りを入れたくなったが、こいつは国王だと思って我慢する。
「マリア！ちょっと待って！あの…」
レナスが一際大きな声で言う。
「なんですか？レナスさま。」
私はきょとんとして振り返る。
「あの、これ私がマリアのために用意したチョーカーなんだけど…。そうだ！クオンが付けて上げて！」
そう言ってごそごそとレナスはクオンにチョーカーを手渡す。
それを見てクオンは少し唖然とする。
「いいのか、レナス…。」
レナスはこくりとうなずく。
「その方が、マリアも喜んでくれると思うから。」
どうやらそれで仲直りの印にするらしい。
はにかみあう二人。その様子にマリアは笑顔になる。二人が仲良くしてくれるなら、こんな変な格好もたまにはいいかなと思ってしまう。レナスがクオンに手渡したものが何かを認識するまでは。
「じゃあ、付けるぞ。マリア。」
そう言ってクオンが掲げ上げたのは、首輪だった。艶やかな皮のベルトに渋いシルバーの金具が光る。金製のプレートにはマリアの名前。そこから伸びるのは鉄の鎖。どうみても首輪だ。チョーカー

ではない。
「ふん！」
私は思いっきり陛下の手をたたき、首輪を地面に叩きつける。
誰が付けるかこんなもの！
「ああ！！嫌がられちゃったじゃない！やっぱりクオンになんか任せるんじゃなかった！ばかー！」
誰に任せるとかいう問題ではない。
「なんだと！お前が用意したものが悪いんだろうが！」
その通りだが、普通に付けようとした奴に言われたくない。
「野蛮なあなたじゃ、マリアを着飾らせるなんて無理な話だったわね！」
「貴様の選んだ衣装では、マリアを満足させられんという話だ！エセ聖女が！」
そしてまた始まる喧嘩という枠を超えた世界的危機をはらむ睨みあい。
やっと落ち着いたと思ったのに前には、世界最強の王と王妃が、謎の闘気を発して対峙している。
「いやー、驚きましたー。一度収めるふりをして、また争いを起こさせる。安心させてから絶望に叩き落す。悪魔の所業。これで周りの絶望感は軽く二倍を越しましたねー！いよ、この悪女！どうです、王宮に勤めるものの悲鳴の味は？甘美ですかー？」
後ろにはマリアベルの肩を掴んで黒いオーラを放ちながら言う宰相がいる。
状況は数分前に戻っていた…。
マリアベルは頭を抱えて座り込みたくなる。
もう、お分かりだろう。クオンとレナスが仲が良いのなんて嘘っぱちだった。
外面がよく利害関係から結婚をした二人だが、その結婚生活は２年で破綻を迎えようとしていた。
困った側近たちは、ガス抜きとして公妾を王に娶らせることを考

えた。
そこで信じられないことが起こる。
公妾にと応募して来た数多の女性の一人に、王と「王妃」が同時に一目ぼれしたのだ。
二人は公妾としてこの子が来てくれるなら、結婚生活続けてやるとのたまった。
かくして王と王妃の寵姫(いけにえ)が誕生する。
その女性の名はマリアベル。
彼女の仕事はみっつ！
ひとつ、王と王妃の仲を取り持つこと。
ふたつ、王と王妃の喧嘩を止めること。
みっつ、王の子供を産むこと。（王妃は絶対に生みたくないと言ってるから…。）
かくして一人の女性を間に置いての、人類の英雄たる王と王妃の危うい夫婦生活が始まる。

3羽

ことのはじまりはなんだったろう。

そう、遡ればあの結婚式だ。あそこから私の運命はあさっての方向にねじまがりはじめた気がする。

私には婚約者がいた。５歳年上の許婚ルパート。侯爵家の嫡男である彼は、子爵家の娘にすぎない自分にはもったいない相手だったが、彼の家であるギルバード侯爵家は商才に溢れる貴族として有名であり、財力、権力は公爵家に匹敵するとも言われている家だった。

そんな一流貴族の嫡男とみそっかすの子爵家の娘である私が婚約などできたのは、ギルバード家の当主が子爵家の所領を静養地として大層気に入ってくれていたからだった。

個人的には山と畑しかない素朴というより不便な我が故郷だったが、侯爵家当主レオナルドさまはその景色をみて「素晴らしい…。」と熱い涙を流されていた。正直、田舎モノの感覚としては理解しがたい。

そんな幸運な縁あって私はルパートの婚約者になることができたのだ。

ルパートは子供のころからかなりの美形で、幼い時から社交界にデビューする日を貴婦人たちから心待ちにされていた。武芸にも優れ、なんとローレシアン討伐軍の小隊長を務めあげ勲章を授与された。読書ぐらいしか趣味のない、さして美人でもない（宰相が言う傾国の美女はただの嫌味である。）地味な私には重ね重ね不釣合いな人だったが、それなりに時間を重ね親しくなっていたつもりだった。

挙式するとなったのは、私が１９歳のとき。本来なら１５歳になったときに結婚するはずだったのだが、ローレシアンとの戦いに参加した彼は３年間帰ってこなかった。

戦いが終わり帰ってくると、今度は溜まりに溜まった嫡子として

の仕事に追われそれが1年、計4年を経てやっと結婚することになったのだ。
バタンッ
私とルパートの結婚式会場となった教会、入り口の木製の扉が突然大きな音をたてて開かれた。
「その結婚まってください！」
姿を表したのは、ピンク色の髪をツインテールにした小柄で可愛らしい美少女だった。
私はその名を知っていた。
「リリーナ！なぜここに！」
タキシード姿を着て隣にいたルパートは、驚いた声で彼女の名を呼ぶ。
彼女の名前はリリーナ。ローレシアンとの戦いで、ルパートの部隊を援護し、傷ついた兵士たちを癒し支えたラマーナの聖女の一人だ。
彼女はその瞳に何かやたら熱いものを灯しながら、その目に涙を浮かべていた。
「ごめん、ルパート。あなたのこと諦めようとおもったけど。けど、そんなこと無理だった！私、やっぱりあなたのことが好き！」
「リリーナ！！」
彼女の熱がルパートのほうに伝わり、ルパートの中で何かが燃え上がる。
二人の瞳が合わさり、その何かを伝え合うのが私にも見えた。
「ごめんなさい、マリアさん！でも私にとってルパートはとっても大切な人なの！」
そして今度はその熱い瞳が私をサーチして捉える。
「いや…あの…まあ…それは仕方ないっちゃ仕方ないんですけど…。」
そのやたら強いめぢからに私はたじろく。
実はなんとなく知ってた。ルパートの友人として彼女を紹介され

たことあるし、二人が付き合ってるかもしれないというのも噂でなんとなく耳に入ってきてたのだ。
結婚式前に友人と話して、「駆け落ちしちゃったりしてねー。」「あはははー。」とか冗談で言い合ったりもした。まあそれでも結婚すれば落ち着くだろうと思っていたのだ。
まさか本当に駆け落ちなどあるとは思ってなかったが。
だが、それよりも。
「あの…もう結婚式終わっちゃったんですけど…。」
誓いの言葉も、指輪の交換も口付けも…。司祭からの祝福も賜っていた。結婚に必要なことはすべてやってしまった。ブーケは前に取り合って事故があったらしく、くじびきにしてくださいという要請だった。本日の日程はつつがなく終了しました。
普通こういうのは、誓いの言葉の前に颯爽と現れるものではないだろうか…。
だが、私の小さな違和感など、熱く恋の炎を燃やす二人には特に気にならないことだったらしい。
ガシッと熱く手を握られたので振り向いてみれば、やたら間近に炎を灯した瞳のまま器用に涙を流すルパートの顔があった。ちょっと暑苦しくて引く。
「すまない、マリア！俺は…おれはリリーナの事が…！」
感極まって言葉が続かないみたいだ。
「いや…うん…わかったけど。できれば誓いの言葉が終わる前に来てくれればよかったなぁとか…そもそも結婚式前に言えば良かったんじゃないかなとか…だめですかね…あはは…。」
私の細やかな抗議など、豪快に恋の道をひた走る彼らの耳には届かないらしい。
「俺は、俺はリリーナと共に行く！リリーナ！着いてきてくれるか！？」
「ルパートとならどこへだっていけるよ！」
燃え上がった身麗しいカップルは互いを見つめあいながら、教会

の外へ飛び出そうと走っていく。もうみんな見守るしかできない。
だって別世界だもん。
「待て！ルパート！そんなことは私が許さんぞ！」
だが、一人その行く手を阻むものがいた。ギルバード家当主レオナルドさまだ。いつの間に用意したのか片手には鋭く光を放つ剣を持ち構えている。
「父さん！」
ルパートもいつのま用意したのか腰の剣を引き抜く。少なくとも結婚式中はそんなもの持ってなかった。
「父さんどいてくれ！いくら父さんといえども、邪魔するなら容赦できない！」
悲壮な顔で剣を父に向けるルパート。リリーナはそれを祈るように見守る。
「笑わせてくれるわ若造が！貴様に剣を教えたのは誰だと思う！」
「確かに剣は父さんに習った。だが俺は今日こそ父さんを越えてみせる！」
なんでこの人たちはこんなに燃えてるのだろう。
「老骨とは言えまだまだお前などに負けはせん！いくぞ！」
そう言って侯爵さまは剣を振りかぶって飛び掛り。
「ぐはっ」
途中で倒れた。
「すまない父さん！こんなこともあろうかと痺れ薬を朝食に仕込んでおいたんだ！」
「恋の道は肉親にも非情なのね…。」
戦いの無情さに涙を流すリリーナ。
「いや！そんな準備する時間あるなら普通に婚約解消しようよ！なんでそこだけ用意周到なのかな！？私まちがってるかな！」
さすがに私は切れる。
「マリア…。」
あ、やっと反応してくれた。

「すまない、君のことを愛してなかったわけじゃない。ただ俺の中でリリーナが一番大切な人だっただけなんだ。」
だめだ、こいつ話が通じなねぇ…。
「行きましょうルパート！」
「そうだね！二人だけの新たなる道へ！」
脱力感に襲われた私は、手を繋いできらきら光を発しながら去っていく花婿とその恋人をただただ見送った。
後に残されたのは花嫁姿の私と、ぴくぴくと痙攣するレオナルドさま、茫然とする参列者たち。そして脂汗を流しながら成り行きを見守っていた父さまが司祭に問いかける。
「あのぉ…こういった場合、離婚することになるんでしょうか…。結婚成立してなかったことに出来ませんかねぇ…。」
離婚暦が付くと貴族社会では、嫁ぐときの条件がさらに厳しくなる。
私も不安になって司祭を見る。
司祭はぽかんとしていた表情を一変させ、荘厳な顔つきになると静かに両手を上空に掲げた。
ごくりっ
教会に集まったみんなが息を呑む。
ばってん
「アウトー！」
手を頭上で交差させた司祭の声が高々と教会に響き渡り、私の家族たちが失意の体勢で床に膝をつく。
なんかもうどうでも良くなってきた。
そんな訳で私は、結婚して１０分ぐらいでばついちになった。
いろいろ終わったあとで友人がぽんっと肩を叩いてなぐさめるように言ってくれた。
「まあ、処女捧げなかっただけ良かったじゃん。」
それはフォローになっていない。

＊＊＊

それから一年ぐらいたった頃。

こんこんこんと自室のドアがノックされ、返事をするまもなく母さまが入ってきた。

「もう、マリア。たまには外に出ないと、体悪くするわよ。」

うちは大した家系じゃないので母さまはちょっと裕福な庶民の出だ。着てるものはそれなりのものだが、行動は貴族らしいところがなくおばさんじみている。

今も侍女に任せることなく、私の部屋のカーテンを自分でぱっぱとあけていく。

正午の太陽の光が差し込んできた。

「まぶしい…。」

私が文句を呟くと、眉をひそめて小言を言ってきた。

「引きこもってるからそんな風に感じるのよ。ちょっと散歩でもしてきなさい。」

あれから私は引きこもりになっていた。別にルパートが駆け落ちしたことはそれほどショックではなかった。彼らの行動があまりにもぶっとびすぎていたから。ただ趣味の読書以外は花嫁修業に費やしてきた自分の人生やら、結婚式で許婚に逃げられた外聞の悪さやらいろんなことがあって、ここ一年はほとんど外出もせず怠惰に過ごしていた。

手に入れた書庫から持ってきた本を開いてベッドに座ってる私をみて、母さまはため息を吐くとぽんっと右手に持っていたアルバムの束を私のベッドの上に置いた。

「侯爵さまがお見合い相手を探してくれたから良さそうな人見繕っておきなさい。もうすぐ２０歳でしょ。本当に貰い手がなくなっちゃうわよ。」

私はそれを見ていやそうに眉をしかめる。

「もう結婚はいいでしょ。侯爵家にぶっといパイプ作ってあげたん

だから。」
ルパートの駆け落ち事件から一週間後、呆然と故郷に戻った私たち家族に侯爵家から招待状が送られてきた。内容は私の婚姻の件でお詫びをしたいということだった。
みそっかす子爵家の私たちにとって、侯爵家嫡子との婚約というのは千載一遇のチャンスだった。その話が破談になったからには、何らかの補填がほしいのは確かだった。だが同時に相手は侯爵家、馬鹿な要求などをして機嫌を損ねると我が家なんてあっという間に没落してしまう。
結局相手の出方に添い、手に入れられるものだけでも確保しようというのが我が家全員一致の意見だった。
そして家族とともにたどり着いた侯爵家の門、何度か訪れたことがあるが私たちの家とはまるで違う。まわりに広大な庭が広がり、その中心にまるでお城みたいな大きさの綺麗な家が建っている。
案内役の老齢の執事に連れられ、石畳の道を歩く。だんだんと緊張してきた。
そして家の前まで来ると、執事についてきていた侍女が豪勢な装飾がされた扉を両側から開ける。
扉の向こうの光景を見た瞬間、私たち家族は固まった。
「「「「「「「「「マリアベルさま、この度は本当に申し訳ありませんでした」」」」」」」」」
そこには侍女や使用人、侯爵家にいる人間の全員が集まって一斉に土下座していた。
一番前にいるのは当主のレオナルドさまとその妻エレナさまだ。周りには侯爵家の家族や親類が。もちろんみんな土下座している。
「……」
私たち家族は絶句するしかなかった。侯爵という身分の人に土下座され気の弱い父さまが青い顔をして倒れそうになってるのを、母さまが支えている。
そのまま30秒ほど頭を床につけていた侯爵は、立ち上がると熱

い涙をながしながら私の手を握り締めてきた。
「マリアくん、本当にすまない。不肖の息子がかけた迷惑を、いったいどう君にお詫びしたらいいのか。謝っても謝りきれない。」
「い…いえ…。」
やりすぎです。なんてとてもじゃないが言えない。
「あなた、気持ちはわかるけど、こんな場所で話すなんて失礼ですわよ。ちゃんと客間に案内しなければ。」
「ああ、そうだな。君たち来てくれたまえ。客間でじっくり話そう。」
レオナルドさまは流した熱い涙をぬぐいながら、使用人に檄を飛ばす。
「最高級のお茶と茶菓子を準備せよ！我が侯爵家総力をもってもてなせ！手を抜いたものは明日の朝日を見れぬと知れ！」
「いえ…そんな風に歓待されましても…。」
とびだしてきた物騒な言葉に青くなって小声で言う父。だがレオナルド様の耳に入った様子はない。
そのまま大量の執事と侍女にぞろぞろ連れられて客間へと通された。
侯爵家夫妻と、私たち家族は向かい合うように座った。
「さて、今回の息子の蛮行を止めきれず、マリアくんには非常に申し訳ないことをした。改めて謝罪をさせてくれ。」
「いいえ。あまりお気になさらないでください。侯爵さまのせいではないですし、ルパートにも事情があったのだと思います。」
ルパートに共感するところなどまったくないが、侯爵さまにここまでされてこれ以上文句を言えるはずもない。
レオナルドさまは私の言葉を聞くと、目頭を押さえ呻く。
「くぅ、なんといういい子なんだ。それをあいつは…。」
「あなた…ちょっと…。」
侯爵夫人にたしなめられ、レオナルドさまはハンカチで涙をぬぐい視線を戻した。

「ああ…、すまない。今回の件で、マリアくんや子爵家に多大な迷惑をかけてしまった。それについて我が家からできるだけの補償をしたいと思う。」
それを聞いてほっとする。あれだけ壮大な謝罪をされたのだ。こちらからは何も言えない状態だった。もともと幸運で転がり込んできた結婚話とはいえ、うちとしてはちょっとぐらい得しときたいというのがみみっちい本音だった。
「まず我が家が所有するクルーデ金鉱を譲渡しようと思う。」
「ぶほっ」
紅茶を含んでいた父さまが、あわてて右を向いてそれを噴き出す。
クルーデ金鉱は世界第3位の産出量を誇る金鉱だ。その価値たるや、何千億は軽く越す。補償とかとは異次元の話である。
「ごほっごほっごほっ」
咳き込んで何も言えない父さまにかわり私があわてて断りを入れる。
「い、いえ、そんなものとてもじゃないですが」
受け取れません。と言おうとすると。
「わかっているとも！こんなものじゃ君の受けた痛みをぬぐい去ることはできないってことは。もちろん、これだけで済ますつもりなど毛頭ない！これは、君たち家族に迷惑をかけたお詫びだと思ってくれ。」
熱くこぶしを握りしめた侯爵の叫びにかき消される。
いえ…もう離婚の補償とかいうレベルじゃないので受け取れないという話なんですけど…。
「今回君は息子のせいで、未来の侯爵夫人という立場を失ってしまった。」
そういえばそうだったと思いながら、私は落ち着こうと紅茶を一口含み。
「だから君が良ければ、私の妻として迎え侯爵夫人になってもらおうと思う！」

「ぶほっ」
噴き出した。
「ごほっごほっごほっ」
「確かに年の差はある。だが私なりに精一杯、君に満足して貰える夫となるよう勤めるつもりだ！」
立ち上がり握りこぶしを作りながら、大きな声で宣言する
「ちょ…ちょっと待ってください。奥様はどうなるんですか。」
私は青くなりながら侯爵夫人のほうを見る。おしどり夫婦として有名な侯爵夫妻の絆に私のせいでひびがはいったら、一生罪悪感に襲われ、周りから後ろ指を差されかねない。
すると侯爵夫人は、侯爵とまったく同じ格好ですくっと立ち上がる。
「大丈夫よ！私もあなたの侍女になって精一杯サポートするわ！あなたを立派な侯爵夫人にしてみせる！」
「絶対にやめてください！」
使命感に燃え上がる侯爵夫婦に、身分の差も忘れて私は叫んだ。
ばたんっ
私の叫びとほぼ同時に、客間の扉が開いた。
「そうです！さすがにマリアさまとレオナルドさまではお年が離れすぎです。」
「やっぱり夫婦は年が近いほうがいいに決まっている！」
現れたのは私たちより一年前に結婚した、侯爵家次男ジュラートさまとその妻エリーさまだ。
「ルパートさまが失踪された以上、侯爵家を継ぐのはこのジュラート！」
「ジュラートならルパートさまよりマリアベルさまにお年が近い！」
「「ここは私たちが離婚を！」」
「それも絶対に絶対にやめてください！」
ぜぇ…ぜぇ…。
息の会った会話で離婚を申し出てくるジュラート夫妻にまたも叫

ばさせられた。遠慮していると侯爵家ゆかりの夫婦が離婚しかねない。心労と叫びすぎで息が切れた。
「くぅ、確かに誰かと代わりに結婚してすむ問題ではなかった。」
「私たちが浅はかだったわね。」
「おいたわしいわ、マリアベルさま。机に臥せてしまわれて、やはり心の傷が…。」
突っ込みつかれただけです…。
「父上、マリアさまへのお詫びは、心の傷が回復なさった後にすべきかと。」
「うむ、確かに急ぎすぎたかもしれん…。」
状況認識は食い違ってるが、どうにか思いとどまってくれて、私もほっとひと息をついた。
「マリアくんへのお詫びは後日たくさんさせて頂こう。」
どっちかっていうと何もして欲しく無くなってきてるんですが…。
「今回の件で、我が侯爵家とあなたがた子爵家の間にできるはずだった繋がりがなくなってしまった。」
そう、実際ルパートとの事件での被害はそれくらいだった。下級貴族としては自分たちの地位を守る上でも、さらに栄えていく上でも上級貴族との繋がりは重要なことだった。
「そこでだ。」
レオナルドさまは視線を次男のジュラートに向ける。ジュラートはそれを受け取りこくりと頷く。
「このジュラート。侯爵家当主の継承権を放棄します。」
「なっ…。」
高らかな宣言に、再び私と父母の顔が青くなる。まだ何かやるつもりですか。
「そこでだ。リングくん。」
次に矛先が向いたのは、巻き込まれたくないとソファーの端で小さくなり気配を消そうとがんばっていた弟だった。
「は…はい…。」

自分に話題が向けられ青くなりながら返事を返す弟に。レオナルドはさまはにこにこと爆弾発言をぶちかます。
「どうだね。うちに婿養子に来て侯爵の地位を継がないかね。」
「ぶほっ」
お茶など口に含んでないはずだが、口から水分を噴き出し器用に咳き込む弟。
「ごほっごほっごほっ」
だが侯爵はまったく気にしてない。
「残念だがうちにはもう息子がいなくてね。私とジュラートがマリアくんに断わられた以上、血縁をつなぐ事ができない。君が良ければ長女のフィーナと結婚して侯爵の地位を継いでほしい。」
「い…いえ、僕は…。」
子爵家なら留学中の兄が継ぐから問題ないが、小心者のうちの家系がそんな話を受け入れられるはずがなかった、はずだったのだが。
「どれ、フィーナ！」
ぽんぽんっとレオナルドさまが手を打ち鳴らすと、「はーい」と可愛らしい声が聞こえドアが開かれた。
現れたのはふわふわした感じの可愛らしい美少女。亜麻色の髪は緩やかなウェーブを描き背に広がり、大きなつぶらな瞳は夢を見るようぽやっとしている。
「ギルバード家長女のフィーナと言いますはじめまして。」
その可憐な笑顔を見て弟の頬が赤みを帯びる。弟は家族以外の女に免疫がなかった。おまけにフィーナは弟の理想を体現したような女の子だった。
「フィーナ、こちらがマリアベルくんの弟のリングくんだ。近い将来お前と結婚しこの伯爵家を継ぐのだ。ご挨拶しなさい。1」
「え、僕にはちょっと荷が重いので辞退させてい」
あわてて断わろうとする弟だったが。
「まあ！不束者ですがよろしくお願いします！一緒にがんばりましょうリングさま！」

最後まで言う前に手を握られ、フィーナの笑顔を間近で見せられ。
「が…がんばります！」
真っ赤な顔で叫んだ。
「はっはっは、良かった良かった。」
ぱちぱちぱち
侯爵家のみんながほっとしたような笑顔で拍手する。私も他人事なのでとりあえず拍手しといた。父さまと母さまも侯爵家に逆らう気などないので拍手。
こうしてフィーナの笑顔にノックアウトされ心神喪失状態だった弟を置いて、みんなに祝福されながら我が家から未来の侯爵が誕生した。
その後の話し合いで金鉱の件はなんとか断わったが、世界第四位の銀鉱やらウェルスト地方の香辛料の独占交易権、魔法特許などが（半場無理やり）譲渡され、子爵家は一気にお金持ちになった。
帰り際に「困った事があったら何でも言ってくれ。我が家が総力をかけて解決しよう。」と言われ、私は今後、絶対侯爵家の人間には何も相談しないようにしなければと心に誓った。
そして、この親にしてあの子あり、私はルパートは間違いなくこの人たちの家族だと確信した。
こうしてここ一年で侯爵家の後継者を出し、おおきな資産を手に入れた我が子爵家はかつてない隆盛を誇るようになったが、それに反して父さまはげっそりやせ細った。侯爵家との間にできた巨大なコネクションから、隙あらば巨額の資産が送られてきて断わるのに心労を強いられているからだ。
ギルバード侯爵領では『マリアベルさまはこんなに健気で良い子伝説』などというものが伝播され、私がまるで偉人のごとく扱われているという。その中には古代の宗教と結びつき私を崇拝するマリア教なる良く分からないものまで出来たという。
侯爵家によると離婚によって下がった私の評判を回復する計画の一環らしい。もう絶対侯爵領には行かない！

そんな活動が子爵領にも伝播してきていて、離婚したことの噂も相まって私は極めて外に出たくない状況になっていた。
私が本好きだと聞いて侯爵家がプレゼントしてくれた最新の本が常に補給される書庫はありがたかったが、私のひきこもりにも拍車をかけた。
部屋の掃除を終えた母さまは、ベッドの上で変わらず本を読む私を一度あきれたように見ると、ため息をつき出て行った。
ぱっかぱっかぱっか、ひひーん
本に集中していた私の耳に早馬の足跡が聞こえた。なんだろう、と思ったが私への用事ではないだろうと思ってまた本に集中しようとしたところ。
「マリア！ちょっとマリアー！」
ばたばたと母さまが足跡を響かせながら私の部屋にかけてきた。扉をばたんと開けて入ってきた母は、珍しく満面の笑顔だった。
「あんた、これこれ！」
私宛てってことはまた侯爵家からのお見合いの誘いか。うんざりしながら、差し出してきた封筒を受け取るとそれは侯爵家からではなく、なんと王宮からの書状だった。
「なにこれ…。」
田舎の貴族の娘である私には王家に知り合いなどいなかった。不安になって尋ねてみるが、母さまはにこにこして知ってるみたいなのに答えてくれない。
仕方なく便箋を丁寧に空けると、中には一枚の書状が入っていた。
ながながと続くまどろっこしい文章を読み飛ばしていくと最後にこう書かれていた。
『子爵家令嬢マリアベルさまを我が国の公妾として招致します。』
「はぁ？」
意味がわからず、ついに顔を歪ませる私に母さまははしゃいだように答える。
「実はね。一ヶ月前に、王宮が公妾を募集してたのよ。それでまず

書類選考するってことだったんだけど。それにあなたの資料を送ってみの。」
「それで…。」
「受かっちゃったみたいね。」
「アイドルのオーディションかー！」
私の突っ込みが子爵家の中に木霊した。

3羽（後書き）

何故か3羽にして誰特の過去編突入。
一度書いただけだと会話とかうまくつなげられないので、後で時間があるとき修正していきます。すいません（ノ凸、）
実は2羽も修正しています。

4羽

私はその手紙を茫然と見つめる。

『子爵家令嬢マリアベルさまを我が国の公妾として招致します。』

なんでこんなことになったのか。

「応募するのは美女揃いだろうから、まさかマリアが受かるなんて思ってなかったけど。だめもとでも応募してみるものね。良かったわねー。」

「良かない！」

私はのんきに喜ぶ母さまを怒鳴りつける。

「なんでこんなのに応募したのよ！しかも勝手に！」

「だってあんた引きこもって本読んでばっかりだったじゃない。侯爵さまがお見合いの話を持ってきてくださっても見向きもしないし。このままじゃずっと独りよ。まだ２０歳だからいいけど、これが３０越したりしたら。お世話になってるレオナルド様にも申し訳ないわ。だから妾でも貰ってもらえたらと思って。」

「だからって！」

確かに貴族社会で３０歳の独り身は肩身が狭い。

「妾ってことはあのクオンさまとレナスさまの間に割って入ることになるのよ。そっちのほうがよっぽど肩身狭いじゃない！」

アルザルドとラマーナが併合されて作られた世界最大の国家アマテリアの王と王妃、クオンさまとレナスさま。世界を救った英雄であり、人類の守護者、この国の平和と希望の象徴たる夫婦だ。二人の仲を引き裂いたりすれば、針のむしろどころの話ではない。世界の歴史に名が残る。間違いなく悪人としてだ。

「子供が出来ないんですって…。公妾を召されることになるなんてレナスさまお可愛そうに…。」

「あんたがいうなー！」

「でも王家からの書状だし、今更断るわけにもいかないでしょー。

このままじゃ一生ばついち独身のままよ。とりあえず行ってきなさいよ。」
「ぐぐぐっ…。簡単に言って…。」
「それにそろそろレオナルドさまが迎えに来るはずよ。」
「なにぃー！？」
どどどどどど
母さまの言葉に呼応するように、大量の蹄の音がする。
がばっと窓にすがりつき外を見ると、そこにはたくさんの騎馬兵を引き連れ自らも甲冑を纏ったレオナルドさまがこちらに走ってきていた。
「マリアくーーーーん！迎えにきたぞおおおお！公妾になるそうだね。たとえ世間から冷たい目で見られる道でも、君が決めたことなら我らは応援しよう！君を無事に王城まで送り届けてみせるぞー！」
「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」
侯爵さまが剣を抜き、それに掲げると同じように後ろの人間も手を振り上げ雄たけびをあげる。
「我らがギルバード家四銃士」
「老骨ながらもすべての力を出しつくし」
「マリアベルさまをお守りしよう！」
「ふがふがっふぉ」
その後ろではまったく知らないおじいさんたちが、銃を構えてポーズをとっている。
ガラガラガラ
騎馬部隊の後ろから祭りのみこしみたいに豪快に飾り立てられた馬車がやってくる。
「マリアくんにふさわしい馬車と、腕の良い仕立て屋を用意してきた！君がクオンさまの寵愛を受け、立派な妾になれるよう全力でサポートしよう！」
いつの間にか所領の人が家の前にあつまって、『祝マリアベルさ

ま』『公妾になっても応援してます』などの横断幕を掲げ花吹雪を散らしている。
近くに住む領民の人たちが、こちらに向かって「がんばってー」などと声援を飛ばしている。
出店まで開かれていて、酒やら香草焼きやらを手に持ってどんちゃん騒ぎだ。
『マリアさま送別会会場はこちらです。』という立て札はなんだろうか…。
中にはハンカチで目元を何度も拭っている人もいて、完全にお別れムードだ。
「ねぇ…、私の選択権はどこに…。」
「どこにもないじゃない？がんばってね。マリア。」
いつの間にか家に上がりこんでいた友人が、出店のジュースを飲みながら私の肩をたたいて去っていった。

＊＊＊

それから、私は王都へ連れられていった。
馬車は王都の中央通りを王宮に向かってゆっくり進んでいる。私はそっと窓から外を見ようとして。
「ひっ…」
慌てて隠れた。
「みなさん歓迎のためにこんなに集まってくださってるのですね。」
侯爵家から調達された侍女が、にこにこ笑顔でお茶を入れながら言う。
「絶対ちがう！絶対ちがうし！」
大通りの端に山のように集まった人々。若い人から中年、老人、夫婦や恋人、女の子たち子供たち、みんなが凄い顔でこの馬車を睨んでいた。
そこから感じられるのは紛れもない敵意。嫌でも国の英雄たる夫

妻の妾になることが、どんなことかを私に教えてくれる。
「マリアさま。宿でクッキーを焼いてきたんです。どうかご賞味ください。」
能天気な侍女がお茶うけに出したのは小金色に焼けたおいしそうなクッキーだったが。
ぽりぽりぽり
味がまったく感じられない…。
胃が痛くなってきた…。

＊＊＊

「……」
「まあ、マリアさま肌が真っ白ですわ。いつもよりお綺麗です。」
王城についても状況はまったく変わらなかった。衛兵から侍女、文官まで凄い勢いで睨んでくる。お蔭で血の気が引いて、侍女に褒められてしまった。
侯爵家から来た侍女はのん気な笑顔で私に話しかけてくる。なぜ侯爵領の人たちはこんなにも神経が太いのだろう。いや、もしかしたらまったく気づいてないのかもしれない。でもどうやったらこの針のむしろのような視線に気づかずにいられるのだろう。
そんな疑問を抱いていると、向こうの方からシンプルなスーツに身を包んだ銀髪の青年が優雅な仕草でこちらに歩いてきた。
私はその姿を見て目を見開く。
「銀の狐…カルーア…。」
最終決戦における英雄の一人であり、勇者クオンと聖姫レナスをその知恵と戦略により影から支えた参謀。その表にはあまり出ないがその貢献度は王と王妃二人に匹敵すると言われている。そして現在はアマテリアの宰相をしていて、国政にその辣腕を振るっている。
歴史の教科書にのってもおかしくない。いや、確実に乗るだろう人物だ。

世情には疎い私でも本に乗っていた写真でその姿は知っていた。
突然の偉人の登場にしばし茫然としたが、はっと我に帰る。カルーアさまと言えばクオンさまとレナスさまの一番の側近だ。公妾の件もきっと快く思っていないに違いない。
最終決戦でも有数の英雄に睨まれたら、命がいくつあっても足りない。
私は自分の未来が想像以上に危ういことに今更ながら気づき真っ青になる。
背の高い銀色の髪を持つ青年が近づいてくるほどに、頬から嫌な汗が噴出してくる。
ごめんなさい。申し込んだのは私じゃないんです。許してください。成敗するなら母さまとかにしてください。
と、目の前に立った青年に思わず土下座しそうになったとき、青年はその細い目を優しげに曲げ優雅な一礼をした。
「良く来てくださいました、寵姫さま。アマテリアの宰相であるカルーアです。以後お見知りおきください。」
その言葉に自分への悪意らしきものは見えなかった。むしろ本当に歓迎してくれているようにすら見える。
そうだよね。
良く考えたらこの国の中枢を担う人間なのだ。公妾の件についてもちゃんと受け入れているはずだ。歓迎できなくても私情など挟んだりはしないのだろう。
やはり英雄となると一般人とは一味違うのだ。
優しい笑顔と紳士的な態度はこれまでの旅と人々の視線に疲れた心を癒してくれる。英雄は伊達ではないと、私はカルーアさまに尊敬の念を抱いた。
ほっとすると、ふと先ほどカルーアさまが言った台詞がひっかかった。
「寵姫さま？」
首をかしげる。寵姫とは妾の中でも王の寵愛を受けた女性に使わ

れる呼称だ。王に気に入られるどころか、会ったことすらない自分に使われるような呼称ではない。そして王と会ったとしても、世界最高の美少女、天使の顕現と呼ばれるレナスさまがいるのに、自分を気に入るはずなどなかった。

むしろこんな不細工いらんと追い出されたりしないか期待してしまうぐらいだ。

「はい、マリアベルさまのことですよ。王の寵愛を一身に受ける公妾が呼ばれる呼称です。」

ざわっ

周りにいた王宮勤めの侍女や文官たちの間に動揺が走る。王妃の名前を呼び涙を流して座り込む侍女まで出てきた。それを慰める侍女の目にも涙が浮かんでいる。

そして私を睨む視線も一層と強さをました。

何これ、どんな罰ゲームですか？

そもそもクオンさまとは初対面どころか会ったことすらないはずだ。愛を一身に受けるどころか、知り合いですらない。

誤解です。これは何かの間違いなんです。

と言い訳したら信じてくれるだろうか。もはやアウェイどころの話ではない親の敵をみるようなまわりの視線にそう思う。

「それではこれからクオン陛下とレナス王妃殿下にお会いしていただきます。どうぞこちらに。」

まわりの騒ぎなどまるでなかったかのように、カルーアさまは笑顔で私をエスコートする。

はやくこの場から逃げ出したかった私にはありがたかったので素直についていく。

王城の廊下を歩いていると不意に人通りが少なくなっていくことに気づく。さっきまでは常に侍女や文官、貴族らしき人たちが通りかかってカルーアさまに挨拶（と私をひと睨み）していったのだが、今はもう誰も歩いていない。

思わずキョロキョロしてしまうと、カルーアさまが気づいたよう

で答えてくれた。
「王と王妃の居室に近づけるのは、王都でもわずかな人間だけです。侍女にも信用のおける人間を使っています。」
なるほど、警備上の理由でそうなっているのかと私は納得する。
「ふふ、あんなもの国民に見られるわけにはいきませんからね。」
だからこの時カルーアが小声でそう呟いたことにまったく気づかなかった。
廊下を進んでいくと、やがて大きな扉が見えた。鉄製の頑丈そうな扉だが、美しい装飾が施されていて物々しい雰囲気はない。扉の横には二人の兵士が立っていた。
私はその兵士たちの顔を見て、目を見開く。
「シンシア…、ルシア…。」
「よくご存知で。寵姫さまは博識でいらっしゃいますね。」
知ってるも何もカルーアさまと同じく決戦の英雄たちである。クオンさまたちほどの知名度はないが、知っている人はちゃんと知っている。アマテリアは最高の英雄二人が作った国であり、その国の中枢を担うのも英雄である仲間たちであることは知っていた。
だが、本で見るような有名人が実際に登場することには、いちいち驚きを禁じえない。しかも門番である。職業を見下したりするつもりはないが、英雄の使いどころとしてはやたら豪華すぎるのではないか。
「うっ…。」
二人をそっと窺うと、王都の人たちのように睨んではこないが感情を読めない瞳で見つめられこちらがたじたじになってしまう。やっぱり内心では嫌われてたりするのだろうか。
「さて、寵姫さま。これより先は侍女は置いて、寵姫さま一人でついて来ていただけますでしょうか。ここより入れるのは限られた人間だけでございますので。」
え、やだ心細いし。
侯爵家のちょっと脳天気すぎる侍女でも、この完全アウェイの状

況ではいて欲しかった。ゴネたら一人ぐらいなんとかならないかと思って横を見ると、侍女たちの姿は影も形もなかった。
「えっ…？み、みんなどこ…？」
愕然としてきょろきょろとしてしまうと、ドレスの袖口から紙切れが一枚ひらひらと落ちた。
なんだろうと拾い上げてみて見ると、
『ご武運を！』
という文字が侯爵家の侍女がデフォルメされたキャラがぺろっと舌を出したやたら可愛いイラストと共に書かれていた。
絶望と脱力感に紙は再び手のひらからひらひらと地面に落ちていく。
「さて、侍女の方々も立ち去られたことですし、中に入って頂きましょう。」
味方不在の絶望に崩れ落ちかけた私は、そのままカルーアさまにずるずると引きずられて扉の中に入っていった。
視界の端にルシアさんが燃えるゴミの袋を持って私が落とした紙切れを拾ってるのが見えた。
案外、良い人なのかもしれない…。そう思った。

＊＊＊

それから、私は待合室らしきところに小一時間ほど待たされている。
カルーアさまは何かやらなければならにことがあるらしく部屋には誰もいない。
中に入ったら英雄に囲まれてリンチされたりするのではと、自らの想像に恐怖していた私も用意されたお茶を飲んで少し落ち着いていた。
だいたいクオン陛下とは初対面になるわけだ。母さまがどんな応募の仕方をしたか知らないが、私が選ばれたのには何らかの誤解が

あるはずだ。みそっかすの下級貴族としては、今更こちらから嫌ですとは言えない状況だが、陛下のほうが直接会って気に入らずに断るという可能性もある。
椅子に座ったまま正面を見ると、クオンさまとレナスさまが仲良く寄り添って微笑んでいる壁画が飾られている。クオンさまもレナスさまもとても美しく、まるで神様と天使みたいな夫婦である。その固く結ばれた手は、二人の強い絆を表している。
そうこんな最高の恋人同士の中に私など入れるわけないのである。
王都の人たちの心配は杞憂である。
だが、同時に思う。その愛が奪われることは万に一つも無いとはいえ、こんなにも仲睦まじく愛する夫が形だけでも公妾を迎えるという事実は、レナスさまを深く傷つけるだろうということを。
ズキンッ
絵画の中で幸せそうに笑う二人。天使のように優しく愛らしい笑顔を浮かべるレナスさま。今レナスさまはどういう気持ちでいるのだろう。
公妾の謁見には王妃も付き添うことになっている。勝負にならないような相手とはいえ、夫の傍にいることを許されたもう一人の女性を見てどう思うか。
その優しい御心は国中を癒し、誰よりも強い心で英雄たちの軍を支えたと言われる少女。泣き顔は決して見せないかもしれない。でもその心は深い悲しみに包まれているだろう。
もしも、クオンさまが拒否されなかった時はこちらから断ろうと思った。なるべく、出来れば、婉曲に、それとなく、問題が起こらない程度で、さりげなく。
そう私が若干後ろ向きな決心をしたところ、カルーアさまが戻ってきた。
「お待たせして申し訳ありません、寵姫さま。早速陛下の下へご案内致します。」
カルーアさまは優雅な一礼を再び見せ、私を連れて行こうとした。

「あの…、カルーアさま。」
「どうされました？寵姫さま。」
私の呼びかけにカルーアさまは首をかしげて返事を返す。
「寵姫と呼ぶのはやめていただけないでしょうか。」
そんな呼称を聞いては王妃さまはさらに傷つかれることになるだろう。そもそも陛下とあったことすらないのに寵姫も糞もないのだが。
「ふーむ…。」
カルーアさまは数瞬悩まれたようだが、
「まあ、いいでしょう。これからはマリアさまとおよびしますね。」
と言ってくれた。それから、
「私のことはカルーアとお呼びください。」
と言った。
小心者の私はそんなの無理なので、なるべく名前はよばないようにしようと決心した。
そうして私は今、謁見の間の扉の前にいる。
「あまり緊張などされないよう気軽にされてくださいね。」
とカルーアさまは優しい笑顔で言ってくれたが、緊張しまくっている。
この先にいるのは世界の英雄にして、この国の王と王妃であるクオンさまとレナスさま。この国を治め、民に称えられる国王夫婦。そして私は仮にとはいえレナスさまの恋敵みたいな状況。
心臓がどくどくと嫌な音を経てる。
私は生唾をごくりと飲み込む。
覚悟を決め扉を開けると、そこには血みどろで殴りあうクオンさまとレナスさまがいた。
バタン
閉める。
「おや、どうかされましたか？」
カルーアさまが優しい笑顔のまま尋ねてくる。

「いえ、ちょっと医者を紹介していただけませんか。どうも目の調子が悪いようで。」
私は目頭を押さえ呟く。最近の精神的疲労のせいだろうか、幻覚が見え始めたみたいだ。
「それはいけませんね。私が見てみましょう。医師の資格を持っているのでご安心ください。」
そう言ってカルーアさまは私を上に向かせ、まぶたを指で開き魔法の光を当てチェックする。
「ふむ、本の読みすぎで近視がちですが、それ以外はいたって健康ですよ。」
「そうですか…。」
そうなると脳の異常だろうか。ストレスが原因なのかもしれない。実家に帰れたらゆっくり静養して本でも読もう。そう心に決めた。
ふう、と深呼吸して一息つき、心を落ち着ける。
大丈夫大丈夫、私は正常だ。ちょっと疲れて幻覚が見えただけ。もう落ち着いたしあんなもの見えないはずだ。
そうしてもう一度扉を開ける。
そこには殴りあう国王夫妻の姿はなかった。
良かった幻覚だった。ほっと一息つく。
「いらっしゃい、マリア！私、王妃のレナスよ。よろしくね。」
気を取り直して中を見ると、そこには天使がいた。
金色のふわふわの髪、柔らかく白い頬、こちらを見る蒼い宝石のような瞳、その姿はまさしく天使。翼が生えてないのが不思議なぐらいだ。
湛える微笑はあの美しい絵画以上に優しく、思わず見ほれてしまった。
「あ…、わたしマリアベルと申します。よろしくお願いします。」
なんとか立ち直り挨拶する私に、レナスさまは笑みを一層深めた。
「くすっ、マリアったらぼけーっとしちゃってどうしたの？」
あまりに屈託のない態度に戸惑う。相手にならないとはいえ、一

応彼女と王の寵愛を争う役職として来たはずなのだが。
いや、実際相手にならない。とてもじゃないが敵うどころか勝負になるはずもない。というか勝ち負けを言う事すらおこがましい。それどころかこんな美少女が隣にいたら、私の存在が認識されるかすら怪しい。
そうだ。確かにそうだ。うん、心配などすることなかったのかもしれない。私程度の存在が王妃さまの心を揺さぶることなどありえなかったのだ。良かった良かった。
もしかしたら陛下もそんなことを考えて私を選んだのかもしれない。
いや、しかしだ。本当は心の底では傷ついているのかもしれない。それを誰にも見せまいと、優しい心で私にも接してくれてるのかもしれない。そうだとしたら、出来るだけ傷つけないような態度で陛下と王妃殿下に接しなければいけない。
思考の海に陥りかけたとき、はっと気づく。そういえば、陛下に挨拶していない。
これはまずい。陛下に謁見に来たのに、その陛下に挨拶すらしていないのだ。不敬罪になってもおかしくない。
私は慌ててクオンさまの姿をさがし
「ぎゃあああああああああああああああああああ」
悲鳴を上げた。
「どうしたの、マリア。急に叫び声あげちゃって。」
「おや、どうされましたか？マリアさま。」
無垢な笑顔のままのレナスさまと扉の向こうからひょいと現れたカルーアさまが、不思議そうに問いかけてくる。
私はその態度のほうが不思議だった。
あの光景はまた目の錯覚なのだろうか。
「あ、あの陛下が化け物に襲われているように見えるんですけど。」
私が恐る恐る指差した先には、何やら魔方陣を纏った口だけの化け物が陛下にかじりついていた。

「あー、あれですか。まあ大丈夫でしょう。」
どうやら目の錯覚ではなかったらしい。
いやいやいやいや、全然大丈夫じゃないでしょう。
「心配しないで。マリアのことは決して襲わないわ。」
「え、そんな馬鹿な…。」
どうみても危険生物だ。陛下を食べたら間違いなく私たちに襲いかかってくる。
「だって私が召喚した魔法生物だもの。」
天使の笑顔のままでレナスさまは言った。
「へ…？」
「凄いでしょ。獰猛で忠実な私の一番の召喚獣ベグドールよ。」
一瞬頭が真っ白になる。
テンシサマガナニカヨクワカラナイコトヲオッシャッテル。
「あの生物は王妃殿下が召喚されたと…？」
「うん。でも王妃殿下って呼ばれたくないなぁ。親しみを込めてレナスさまって呼んで？」
「えっと、レナスさま、で何故陛下が襲われているんでしょうか…。」
「だってむかつくじゃない。あの野蛮人。自分が先にマリアと話すって聞かないのよ？」
ハイ？
天使の笑顔は変わらず美しい。
「えっと…。へ、陛下を助けないと…。」
「ふ、安心してくれマリア。これしきのことでやられる俺ではない。あと、俺のことは親しみを込めてクオンと呼んでくれ。」
上半身を化け物に食べられた状態で器用に喋り出す陛下を茫然と見る。
「レナス、お前は化け物で俺の足止めをして先手を取った気らしいが甘いぞ。所詮平和ボケの聖姫の発想などそんなものだ。俺は勇者、勇者とは戦うもの、戦う俺の姿こそ最も美しくかっこいいのだ。貴

様の召喚獣を打ち倒す姿を見て、マリアは俺に一目ぼれするに違いない。」
何を言ってるんだこの人は。
ガジガジ、魔法生物に噛まれながらわけがわからないことを高らかに宣言するクオンさま。
「あー、もう煩いわね。マリアとお話できないじゃない。止めを刺しちゃいなさいベグドール！」
「ええ！？ちょっとっ！」
レナスさまの口から出た物騒な台詞に驚愕する。
召喚獣は大口を開けクオンさまを噛み砕こうとする。
これから起こる惨劇を想像し思わず悲鳴をあげかけたとき。
「来い、レガード！」
クオンさまの声が聞こえ、召喚獣の体がはじけ飛ぶ。
召喚獣の体は光となって消えうせ、後には剣を片手に立つクオンさまがいた。紫銀の幻想的な髪に煌々と光る赤い瞳。その姿は戦神そのもので、見るものに戦慄と美しさを植えつける。バケツまるまる一杯取れそうな唾液さえ被って無ければ。
「どうだい、見てくれかい？マリア。」
髪をふぁさーっと（濡れてるので本当はべちゃりと）かき分け私に視線を送ってくるクオンさま。
「は、はぁ…。」
事態についていけない私にはそう答えるしかない。
「ちっ、しぶとい奴め。」
レナスさまから舌打ちが聞こえた。歪んだ顔も天使のように美しい。ちょっと邪悪だが。
というか、何だろうこれ。さっきから何なんだろう。
「あの程度の奴で俺が倒せると思ったか？おろかなやつだ。まあ、間抜けなエセ聖女どものペットはあの程度が関の山だろうがな。」
「うるさいわね、野蛮人。あんたみたいな粗暴な奴が、私の可愛いベグドールを馬鹿にするなんて万死に値するわ。それ以上に、私の

マリアを変な目で見たのが許せない。今日こそ、アマテリアの地下に埋めて、そのまま冥府に直通便で送ってやるわ。」
「やれるものならやってみろ。貴様こそ、お前らが信じる天国とやらにかっ飛ばしてやるから喜べ。そして安心しろ。マリアは俺が幸せにする。」
ものすごい勢いでいがみ合いだす二人。あれ、おかしいなぁ…。
私の目の前にいるのはクオンさまとレナスさま。世界を救った末に結ばれ、奇跡の国を作り出した恋人たち。お互いを深く愛し合い、世界にも希望をもたらす最高の夫婦。世界で最も美しい男と女二人が並び立つ姿は、もはや神の奇跡というべきカップル。
なのに、目の前で二人は睨みあい、拳を握り、いがみ合いながら猛獣のように牽制をし合っている。
あれ、世界で最も深い絆を持つ夫婦はどこにいったの？
それとところどころ私の名前が出てくるのは何故？
「やれやれ、今日ぐらいは喧嘩しないように、全然だめでしたね～。」
背中からカルーアさまの声が聞こえた。
振り向くとソファーにどっかり座り込み足を投げ出したカルーアさまがいた。
え、何この人。態度悪い…。
その姿には前までの紳士的な青年の面影はどこにもなかった。
「あのぉ…、なんなんですか。これ…。」
私は思わず足技の応酬で牽制し合う国王夫婦を指差してしまう。
「見てわかりませんかー？わが国の国王さまと王妃さまですよ。」
ぱたぱたと手で自分を仰ぎながら、だらけた姿勢でいってくるカルーア…さま…。
「でも国王夫妻は、お互い深く愛し合ってるって…。世界で最も仲の良いカップルだって…。」
二人の様子は、もうお互い殺意ありありの状態だ。喧嘩するほど仲が良いなんてレベルではない。

私の問いかけをカルーアさまは鼻で笑う。
「はっ、あんなの私が宣伝用に作った大嘘ですよ。ああー、大変だったなぁ。この二人を仲良し夫婦だと国民に認識させるのは。お陰で王と王妃の間は厳重警戒態勢だしかったるくて仕方ないですよ。はー、本当だるっ。」
一体なんなのだこれは…。
「あの…、私はなんで呼ばれたんでしょうか。」
「ああー、それですか？」
と態度が悪い笑顔のままカルーアさまが何か続けようとしたとき、ふいにぐいっと腕が引っ張られる。見ると、いつの間にか横にいたレナスさまが満面の笑顔で私の腕に腕を絡めていた。
「マリアはね、私の寵姫なの。マリアの身も心も私のものよ。」
「お、王妃さまの寵姫…？」
なんじゃそりゃ。王妃さまの寵姫なんて、そんなもの存在するのだろうか…。
そう思っていると、後ろから手が伸び引っ張られ誰かに抱きこまれる。誰かというか、この場にいるのは三人なので誰だかまるわかりだ。
「何を言う、マリアは俺の寵姫だ。俺と愛し合うと運命で決まっているのだ。」
いや、確かにそれは正常だけどなんかおかしい。というかこの状況がおかしい。
「まあ見ての通りですよ。」
いいえ、わけわかりません。
「もういい加減仲良くさせるのも限界に来てたんですが、離婚するとアマテリア崩壊の危機ですからね。悪あがきに公妾でも募集してみたら、なんと二人ともあなたに一目ぼれです。二人ともあなたが寵姫になってくれるなら、夫婦生活続けてくれるそうですから。あなたが二人の寵姫になってくれればアマテリアも安泰です。この国のためにがんばってくださいね～。」

手をひらひらさせて投げやりに言うこの国の宰相。
カルーアさまの言葉が耳から突き抜けていく。え、ちょっと、意味がわからない。
「あ、あのちょっと離していただけませんか。」
クオンさまとレナスさまに拘束されて動くことすらままならないのでお願いする。
「「ええー。」」
二人はこんなときだけ一緒に不満げな顔をしたが、もう一度「お願いします。」と言うと離してくれた。
「ちょっとこちらに来ていただけませんか。」
私はだるそうにしているカルーアさまの腕を引っ張る。
「はぁ、やれやれ。なんですか？」
態度が悪いがなんとかついてきてくれた。
私はレナスさまとクオンさまから離れた柱に隠れると、
「無理です！無理です！そもそも公妾応募の件から誤解なんです。お断りさせてください。」
全力でカルーアさまに拒否の意思を伝える。
もういろいろと無理だ。絶対無理だ。いろいろと状況がおかしかったり、責任が重過ぎたり、そもそも未だわけがわからなかったり、無理がありすぎる。とにかく無理。無理。
「おやおやー、困りましたねぇ。国家の危機なんですよ。何とかしてもらえませんかねぇ。」
「いや、本当に無理ですから。実は公妾への応募も母親が勝手にしただけなんです。そちらからお断りしていただけなければ、こちらからそれとなく言う予定だったんです。」
「はぁ…、クオンさまもレナスさまもがっかりしてますよ。」
カルーアさまの指差す方を向くと、ばっちり聞こえていたらしい。悲しそうな瞳で二人が見てくる。子犬みたいに。
うっと心が痛むが、こちらだってわけがわからないものに巻き込まれかねない人生の瀬戸際だ。結婚式のときとは比にならないぐら

いの努力で気持ちを立て直す。
ここであきらめたら私の人生の平穏が危ない。もしくは人生そのものが危ない。
「ご、ごめんなさい。他に良い人が必ず見つかると思います。」
「はぁ、仕方ありませんねぇ…。」
ほっ…、良かった。あきらめてくれたようだ。
「それではこれ、お願いしますね。」
ぽんと渡された紙束を私は見る。公妾破棄の契約書とかだろうか。と私は見てみるが、そこに書かれているのはたくさんの数字だった。それに神晶石やら朱銀やら、超高価な鉱石の名前が連ねられている。
正直、よくわからない。
「なんですか？これ。」
「何ってあなたのための後宮の今までの建設費用ですよ。あなたがいなくなるからにはすべて無駄になってしまいますからね。しめて2兆コルダになります。これを払えば、あなたも晴れて公妾を辞すことができますよ。」
「ぶほっ」
思わず吹き出す私。
「な、なんですか。その金額。」
「いやー、寵姫さまを迎えるということでクオンさまもレナスさまも張り切りすぎましてね。国家予算を大規模に投入されましたよ。」
「ていうか！な、なんで私が払わなければいけないんですか！」
私は必死で抗議する。そんなわけのわからない話があるか。
「おや、契約書を読まれてないんですか？公妾を１０年以内に自ら辞す際は、国家があなたにかけた費用を返済すると書かれていたでしょ。」
「ええ！？って、そもそも私は申し込んでないからそんなもの読んでないんですけど！母さまが勝手に申し込んだだけです。」
私の反論は反論するが、カルーアさまの嫌な笑顔は変わらない。
「でもこれはあなたのサインと拇印ですよ。」

「はぁ！？」
そう言ってカルーアさまが示してきたのは、紙束の後ろにある契約書だった。
見てみると拇印はよくわからないが、サインは私の筆跡だった。
「な、なにこれ…。」
「あなたのお母さまが、『本を読んでるとき新刊が届いたからサインしてっていったらあっさり何も見ずにサインしちゃったわよ。おほほ。』っておっしゃってましたよ。」
「母さまあああああああああ」
まったく記憶がないが、騙されたことに気づく。
「た、たとえそうでも無効です。自分の意思で契約を結んでないんだから不当契約です。」
「構いませんよ。訴えてみますか？アマテリアでの裁判で私に勝てるとお思いでしたらご自由にどうぞ。」
「ぐぐっ…。」
「あ、国外で訴えても同じですよ。世界最大の国家の宰相の力を甘く見ないでくださいね。」
「……」
私はもう沈黙するしかなかったが、さらに宰相の追い討ちがかかる。
「まあ、今の子爵家の資産を全部売り払えば１００分の１は返せるかもしれませんね。まああなたの母さまはそんなことしないと断言してますけど。寵姫として王と王妃の仲を取り持ちながら、贅沢な生活を送りますか？それとも１９歳にして世界一の借金持ちになりますか？」
宰相の言葉はまだ続く。
「もちろんあなたが２兆コルダの借金を返せるなんて思ってもいませんが、努力はしてもらいますよ強制的に。私のすべての力を費やして、あなたの体、人生から出来うる限りのお金を捻出してみますよ。人間らしい生活が送れるなんて思わないでくださいね。」

目の前にいるのは初対面に会った紳士な英雄の面影などまったくなかった。鬼よりも悪魔よりも邪悪な存在が目の前にいた。
そして悪魔は微笑みささやいた。
「さあ、どうします…？」
目の前に涙目の二人がぷるぷる震えながら私に向き合っている。
「ごめんね、マリア。がんばってこいつと仲良くとはいかなくても、ぎりぎりまでがんばるから出て行かないで。」
祈るような目で私を見つめてくるレナスさまは本当に可愛らしい。
「すまない、マリア。俺もこいつとはいかんともしがたいものがあるが、マリアのためなら血反吐を吐く覚悟でがんばっていくつもりだ。俺と一緒にいて欲しい。」
そう言う真剣な顔で言うクオンさまの姿は、荘厳でとても美しかった。
そして私は後ろの悪魔に邪悪なオーラで肩つかまれながら返事した。
「セ、セイイッパイガンバラセテイタダキマス。」
そうして私は寵姫になった。

4羽（後書き）

えー、とりあえず書きあがったので後ほど修正していきたいと思います。
3羽も修正さぼっているので修正せねば…。
寵姫のおしごとはあまり更新できないこともあって、1話ごとにある程度区切りがつくとこまで書くと決めているのですが、どうなのでしょう。
こ気味よく短く更新したほうが効率はあがりそうなのですが、変な場面でとどめて長いこと更新しなくなってしまったりしそうでどうするべきか迷っています。
一発ネタちっくにはじめたシリーズですが、カルーアだけキャラが固まってクオンとレナス、主人公はまだあやふやだったりします。
サブキャラ増やしつつそれぞれのキャラを固めていけたらなぁと思います。

5羽

パサリッ

柔らかな毛布をひるがえし、私は上半身を起こす。全身には変な汗が滲み出していて、動悸が激しい。

「ふう、変な夢みちゃったなぁ。」

私は枕もとの眼鏡を手探りで探す。

「あら、どういう夢を見られたのですか?」

「いやいやー、お恥ずかしながら、王宮で寵姫なんてありえない役目で迎えられる夢など見てしまいまして。少女趣味もいいところですよね。年甲斐も無い。」

「そんなことありませんわ。王宮ロマンスはいつも女の夢ですもの。」

「まあそういう趣向の人もいますねー。」

私は会話しながら、探し当てた眼鏡をつける。

ふむ…。

「で…、あなたはどなたで、ここはどこでしょうか…。」

「私はマリアさま専属の侍女のエルダで、ここはマリアさまのために用意された後宮でございます。」

夢ではなかった。

＊＊＊

「エルダさんって英雄ではないですよね。」

「そうですね。英雄ではありませんが、クオンさまとレナスさまの信頼を頂きマリアさまのお世話を担当することになりました。よろしくお願いしますね。」

にっこりと優しく微笑みながらお茶を入れてくれる。

すらりとした長身に肩で綺麗に切りそろえられた茶色の髪、立ち

振る舞いは優雅でとても綺麗な人だ。落ち着いた優しい雰囲気を持っている。
クオンさまとレナスさまのことだから、侍女にまで英雄を配置していないか心配してたのだがそんなことはなかったらしい。普通の人が傍にいてくれることに安堵する。
「マリアさま少しお時間をよろしいでしょうか。他の侍女たちも紹介したいので。」
「あ、はい。構いませんけど…。」
自分の家の侍女は、お手伝いさんみたいな感じだったので、自分専属の侍女がいるだけでも恐れ多いのに、まだ侍女がいると言われ正直かなり戸惑う。
「あなたたち入ってきなさい。」
エルダさんがパンパンと手を打ち鳴らすと、5人の侍女が頭を下げて入ってきた。
「失礼します。」
声を揃えて言った侍女たちが頭を上げたとき私は硬直した。
「マーサです。」
「クリスです。」
「リュークです。」
「ミカエルです。」
「ライナです…。」
知ってます…。
次々名前を告げてくる侍女たちにそう思った。何故知ってるのか。
それは5人とも5人が英雄だったからだ…。
まさか英雄が侍女をやっているとは…。いや、門番の二人を見た時点で予想できたことだったが、エルダさんが普通の人だったのですっかり油断していた。
正直、時代の端っこで静かに生きてきた人間としては、この英雄ラッシュは辛いものがある。
「わぁ、この方がマリアさまなんですねー。」

「クオンさまたちのいけに…寵姫に選ばれるなんて、かわいそ…幸せな方です～。」
「マリアさまのこれからの心労を少しでも労うため、とっておきのお茶をいれますね。」
「あー、ずるい。私がやるもん！」
「クッキー準備しました…。」
キャピキャピ女学生みたいに騒ぎ出す世界に名だたる英雄たち。一部不穏な台詞が聞こえた気がする。
「マ、マリアベルです…。ご存知かもしれませんが、よろしくお願いします。」
ぺこり
一応の礼儀として挨拶する。
それを見て、侍女五人は顔を見合わせると何故か「きゃーっ」と悲鳴をあげて、ヒソヒソ話をはじめる。
「なんか、そそるよねー。」
「クオンさまとレナスさまの気持ちが少しわかります。」
「うんうん！」
「邪な心を抱くと、命が危ないですよ。なんせあの二人に目を付けられてるんですから。」
「かわいい…。」
呆気に取られて見ていると、手を打ち合わせてエルダさんが止めに入ってくれる。
「こらこら、寵姫さまに失礼ですよ。申し訳ありません、マリアさま。この子達は侍女の訓練を受けてから日が浅いものでして。」
「は、はぁ…。」
近頃、英雄たちに対してのイメージが崩れつつある。自分が読んだ本の中では、賢く礼儀正しい人格者たちだったのに…。
「マリアさまの朝食の準備をするわ。マーサとライナはマリアさまの着替えの手伝いを、クリスとミカエルはテーブルと食器を、リュークはお茶の準備をしなさい。」

５人にキビキビと指示を出すとエルダさんは部屋から出て行く。
「はぁ～」
「どうしました？マリアさま。」
私がついた感嘆のため息に、侍女のマーサさんが不思議そうに聞いてくる。
「いやー、エルダさんって凄いなって思って。英雄の人たちにあれだけきちんと指示を出して。私だったら気後れしてとてもじゃないけど無理です。」
普通の人同士として頼りにできそうだ。
「あー、マリアさまは知らないですよね。」
「うん…。一般人はほとんど知らないはず…。」
「え、どういうこと？」
「エルダさまは最終決戦こそ参加されてませんが、その時一人で城の守護を担当されていたんですよ。１対多での戦闘能力では、英雄の中でもレナスさまに次ぎますから。エルダさまが城で睨みを利かせてくれたお陰で、悪魔たちの奇襲を気にすることなく最終決戦に集中できたんです。」
「それでも、１００体の悪魔が城の方に来たらしい…。」
「全部、上陸前に倒しちゃったらしいんですけどね。悪魔たちの血が飛び散る中、踊るように優雅に剣を振るうさまはとても美しかったそうです。」
「二つ名は双剣の鬼姫…。」
「あはははは…。」
普通の人なんていなかった…。
「マリアさま、衣装を準備しました。」
そう言って着替えを手伝おうとしてくれる二人に「あ、自分で着替えられるので大丈夫です。」と言う。
「そうですかー。では、お手伝いが必要なときはお申し付けください。」
意外とあっさり引いてくれた。

衣装を渡され、早速それを着がえ…。
「これ…なんです…？」
「水着とウサミミです。」
私に手渡されたのは、セパレートの白色の水着とウサミミだった。普段着るどころか、人生においてすることがあるのかすら怪しい格好だ。
「なんでこれなの…？」
私は恐る恐る聞いてみる。
「クオンさまとレナスさまが…。」
「お二人の意見を総合したところ、これになりました。」
「なんでですか！」
私は思わず叫ぶ。
「クオンさまの露出度が高い服という直球の願望と、レナスさまのマリアさまをペットのように愛でたいという少々特殊な嗜好を、白いウサギというテーマの元」
「解説しなくていいです。」
「そうですかー。では、どうぞ。」
どうぞって言われても…。私は手渡された水着とウサミミを見つめる。
「着ません…。」
むしろ、着れません。二十歳にもなってこの格好は無理です。というか二十歳じゃなくても人間としてダメだろう、この格好は。
「ええー、似合うと思いますのに。」
「残念…。」
「もっと、普通の服はないんですか？」
「普通ですかー。」
マーサさんは少し思案すると。
「イヌミミとかですか？」
「全然普通じゃないです！もう、自分で選びます！」
私はやたら豪華なドレスがたくさん入っているクローゼットの中

から、なるべく地味で装飾の少ないものを取り出して身に着ける。勢いのあまり人前で着替えてしまったが、あまり考えないようにする。

それから食事をすることになった。

「今日はクオンさまとレナスさまは公用でご一緒できません。」という侍女さんたちの言葉にホッとする。むしろ食事も一緒に取ることになってたのか…。

朝食だというのに、料理は今まで食べたことないような高級料理のフルコース。このお皿に山盛りつまれているのは、一生に一度は食べてみたいねぇと家族と話した幻鮫のキャビアではないだろうか…。侍女さんたちは並んでこちらを見守ってるので非常に食べにくい…。

「あの…クオンさまとレナスさまってなんであんなに仲が悪いんですか？」

向こうに行ってくださいなんてとても言えない小市民な私は、とりあえず会話でもして気まずさを振り払おうと試みる。聞いている内容は切実だが…。

「うーん、そうですねぇ。もともとアルザルドとラマーナは、そんなに仲が良くなかったんですよ。表向きは友好国なんですけど、お互い相手を敵視していて。」

「クオンさまとレナスさまもその典型例ですけど、お互い国一番の勇者と聖姫ですから、特に敵愾心が燃え上がったらしく子供のころから小競り合いを起こしてたみたいですよ。」

「は…はぁ…。」

アルザルドの辺境に住んでた私だけど、ラマーナと仲が悪かったなんて全然知らなかった。

「実際、私たち侍女5人も最初から仲が良かったわけじゃないんですよ。」

「うん…私とマーサはアルザルド出身の戦士…。クリス、リューク、ミカエルはラマーナの聖女。」

そう言うライナさんの言葉を、クリスさんが繋ぐ。
「最初はどう寝首をかいてやろうかと思いましたわ。」
口に手を当て上品に言ってるけど、内容はとてもえげつない。
「私たちもいつか決闘を申し込んで、正々堂々倒してやろうと考えてました。」
うんうん、と同意するライナさん。
「あれ…、でも今は仲が良いんですよね。」
そこには希望を見出したい。クオンさまとレナスさまも、いつか仲良くなってくれるという希望を得るという意味で。だが、それも続くミカエルさんの言葉で絶望に叩き落される。
「だって、クオンさまとレナスさまが暇があれば世界規模の戦争をしようとするんだもん。部下の私たちまで争ってたら世界が滅びちゃいますよ。」
あはは、とあくまでも明るくいうミカエルさん。
「だから、せめて私たちだけでも仲良くすることにしたんです。でも、最近のクオンさまとレナスさまの仲はどんどん悪化の一途を辿っていって。」
「私たちでなんとか市井へ被害は及ばないようにしてたんですけど、それも最早限界でした。私たちは真の最終決戦がおこることを覚悟していましたわ。」
「うん…ローレシアンとの戦いを超える…世界を二分した戦争…。」
「だからマリアさまが、いけに…寵姫として現れてくださって私たち感謝してるんです。」
「この国の、いえこの世界のためにがんばってくださいね。」
気まずさを取り払うために行ったはずの会話だったのに、聞いていく度にどんどん食事の味が感じられなくなっていく。
今、世界の命運は英雄さんたちの手から、私の肩に預けられたらしい。
なんでだあああああー！

6羽

星獣、それは聖女の守護獣としてこの世に生を受ける神聖なる獣だ。
聖女一人に付き生涯一匹だけ存在し、聖女の身を守り共に戦うパートナーとなる。幼いころより聖女とともに生活し、その間にある信頼は親や恋人よりも篤いと言われる。
星獣は命がけで聖女を守り、その願いのために力を尽くす。
聖女と星獣、運命で結ばれた二人の絆はどんなものよりも固く結ばれている。

私はベルスキー。レナスさまに仕える誇り高き星獣である。
幼いころより、レナスさまと共にあり、その身を支えてきた。レナスさまの一番の側近であると自負している。
強く気高く美しい。天使の顕現と呼ばれ、もっとも神聖なる聖女である聖姫にすでに幼くして選ばれていたレナスさま。そんなレナスさまの星獣に選ばれたのだから、私自身の力も伊達ではない。
歴代の星獣の中でもっとも速いスピードを持ち、その動きは高位悪魔ですら目にとらえることを許さない。力も現存する星獣の中では最高、巨人の一撃すら受け止めて見せる。魔力も高い。並大抵の魔術師では私には敵わない。
でも私が何よりも誇りにしているのは、レナスさまへの忠誠心だ。レナスさまのためなら命を投げ出しても惜しくない。陳腐な言葉だが、本当にそう思える。
レナスさまを守り支えるためにこそ私は生まれてきたのだ。

後宮の庭を散歩していると犬がいた。
犬だ。しかもふっかふっかのもっふもふの金色の気持ちよさそうな毛並みの犬だ。

マリアベルが近づいてもお利口そうに座ってじっとしている。
それを見てマリアベルは、飛びついた。
「犬だー！」
そのまま犬の首にしがみつくと、抱きついたまま顔をすりすり寄せる。
「わー！もっふもふ！すごーいもっふもふ！おとなしくてお利口だー！」
マリアベルがいくら抱き着いても犬は暴れることなくおとなしく受け止めてくれる。
マリアベルは犬が好きだった。どうしようもないほど好きだった。
田舎暮らしなのでインドア派ながらも動物には慣れていたが、犬は別格だった。
牧羊犬や農家の番犬などを見てずっと飼いたかったが、母さまが犬は家畜の管理のために飼うものと認識していたので、牧畜をやっていない子爵家では飼わせてもらえなかった。だから侯爵家の一員になれた暁には、犬を飼ってやるなどと密かに計画をたてていた。
「はじめまして、マリアベル殿。お話はレナスさまより聞いております。」
夢中で抱き着いているマリアベルの横から、低い男性の声が聞こえてくる。
飼い主の人かと思ってマリアベルは慌てて立ち上がる。
「ご、ごめんなさい。久しぶりにわんちゃんを見たものだからつい。」
顔をあげて飼い主の人にあいさつをしようとしたが、はたと気づく、飼い主らしき人はどこにもいない。
「あ、あれ…。」
「いえ、レナスさまの大切な人であるマリアベルさまに気に入って頂けるのは喜ばしいことです。」
あれ…。犬が口を開いてて、さっきから声がそこから出ているように見える。

「ただ、私は犬ではなく星獣です。」
呆然とするマリアの前で、金色の毛並みを持つ犬は自己紹介をする。
「ごあいさつが遅れて申し訳ありません。私の名前はベルスキー。世界で最も貴き聖女レナスさまを守護する星獣です。」
犬は前足を上げると、それは見事な礼をしてみせた。

＊＊＊

喋れる犬の登場にマリアはどん引きするかと言えば、そういうことはなかった。むしろテンションが上がりまくった。だって喋れる犬といえば、ファンタジー、犬好きの憧れである。
「それじゃあ、ベルスキーさんは魔法も使えるんだ。」
「はい、特に風と火の魔法を得意としています。」
「すごーい！」
「はは、それほどでもありませぬ。」
ベルスキーは風と火を利用した簡単な魔法（小さな火の竜巻を作る）を見せて、マリアベルを感心させる。マリアベルの反応が近所のお手をする犬をみたときとまったく同じなのは秘密だ。
「私の最も誇るのはスピードですが、力も優れています。マリアベル殿ぐらいなら軽く持ち上げられますよ。」
「えっ。」
その言葉を聞いてマリアベルの表情が固まる。もしかして怖がらせてしまっただろうか。ベルスキーはマリアベルを安心させようと声をかけようとする。
しかしマリアベルは怖がっているわけではなかった。固まった表情がほどけていくと、目がきらきらして頬が紅潮しはじめる。
「じゃ…、じゃあもしかして、わ…私を乗せて走ったりとかできますか…？」
「は…はぁ。それぐらいなら軽いものです。……乗ってみますか？」

たどたどしい言葉に、異様なまでの熱気を感じ取りベルスキーは誘い出されたようにマリアに聞く。
「いいの！？」
犬に乗って走る。それは乙女の夢のひとつ。しかもベルスキーは物語に出てくるような金色の長毛を持った美犬。これに憧れない女の子がいるだろうか。
「ど、どうぞ。」
そういってベルスキーは背中を差し出す。
マリアベルは恐る恐るベルスキーの背中にまたがる。潰してしまわないだろうかと一瞬不安になるのは仕方のないことだ。最近、寵姫の豪華な食生活のせいで体重が気になるわけでは決してない…。
ベルスキーの背中にまたがってみると潰れる気配なんて全くなく、それどころか馬みたいにしっかりと支えられる。出来るとは聞いていたが、一抹の不安があったマリアベルは安心する。
「ゆっくり走りますが、落ちないように背中の毛を掴んでいてください。」
言われたとおりにすると、柔らかいさらさらの毛が手に触れる。さわり心地が良すぎる。そしてベルスキーが地面をけると、周りの景色がゆっくりと流れ始めた。
頬に風を感じる。自分のために優しく走ってくれてるのだろう。振動もまったくと言っていいほど無い。
「うわぁ、すごい。すごいよぉ～。ベルスキーさん。」
マリアベルは珍しく子供みたいにはしゃぐ。
本当に夢みたいだ。喋れる犬、自分を乗せて走れる犬、ふわっふわでつやつやの金色の毛並み。星獣であることなんてまったく忘れている。マリアベルがベルスキーを見る目は恋する乙女のようだった。
「ははは、喜んでいただけて私も嬉しいです。」
ベルスキーも紳士的に笑顔を返す。
マリアベルはふと流れる景色の向こう、レナスの姿を見つけた。

「あ、レナスさまだ。」
遠くにいて表情は見えてないが、こちらを見たまま突っ立っている。
「本当ですな。あちらに向かってもよろしいですかな？」
「あ、ごめんなさい。レナスさまに会いに来たんですよね。私ったら迷惑おかけしちゃって。」
「いえいえ、マリアベルさまへの挨拶もありましたので全然かまいません。むしろ私も楽しかったです。」
「そうですか。よかったぁ～。」
うふふっ、和やかに笑みを交わし、レナスのいる方向へ向かう二人。
そしてたどり着く。
「レナスさま、こんにちは。」
「レナスさま、ご機嫌麗しゅう。」
二人はそろって挨拶する。
「あら、マリア、ベルスキー。凄く楽しそうだったね。」
レナスも笑顔で二人の挨拶に応じる。
「はい、ベルスキーさんは凄いです。私をのせてくれるんですよ！すごく賢いし！もう本当に素晴らしいわんちゃんですね！」
いつになくはしゃいだ様子でベルスキーに抱き着きながらしゃべるマリアベル。
「ははは、星獣なんですけどね。」
ベルスキーも暖かい笑顔で応じる。
「そう、そんなに気に入ったの。良かった。ところでちょっと、ベルスキーと二人で話したいことがあるの。大切な話だからマリアはちょっと後宮に戻っててくれる？」
レナスはそんな二人を見て、笑顔のままで言った。
「あ、そうですよね。ごめんなさい。」
二人は国を治める聖なる王妃と、それに仕える星獣なのだ。やはり他人には聞かせられない重要な案件があったのだろう。マリアベ

ルは少し自分のはしゃぎっぷりを恥じた。
「いえ、気にしないで。またね、マリア。」
「あ、はい。ベルスキーさんまたね。」
でも結局我慢できず、ベルスキーのほうを向き手を振り、マリアベルは去って行った。その姿を、レナスとベルスキーは笑顔で見送った。

＊＊＊

「それでレナスさま、大切な話とは。」
ベルスキーは笑顔を、きりっとした表情に戻し自らの主人に問うた。
「そうね、まず死ね。」
ドンッ
レナスがそういった瞬間、ベルスキーの今までいた地面が爆ぜた。間一髪、横に移動したベルスキーをレナスが絶対零度の瞳で睨む。マリアベルを前にしていたときの笑顔はどこにも無かった。
「レ、レナスさま…！？」
ベルスキーは呆然と豹変した主人を見る。
「飼い犬に手を噛まれるといこうとはこういうことかしら。」
「わ、わたしは星獣ですが？それに何もしていませんよ…？」
戸惑うように言うベルスキーに、レナスは天使の顔をゆがめ地獄の淵から這い出るような声を出す。
「なにも、してないですって？よく言うわね。マリアと二人っきりで楽しそうに話して。マリアの笑顔を独り占めして。マリアを自分の体に乗せて庭を楽しくドライブ？」
最強の聖姫の放つオーラに、大気が震え地面が揺れる。
「獣風情が小賢しいことを考えるじゃない。さぞかしマリアの太ももの感触は気持ちよかったでしょうね！」
「レ、レ、レナスさま落ち着いてくだされ。私は下心なんてまった

くありません！」
「下心があるから私はうまくいかないっていうの！あんたのほうがうまくマリアを喜ばせられるっていいたいわけ！？それは私に対する挑戦状ってわけね！」
ベルスキーはあくまでレナスさまの大切な人であるからこそ、マリアベルに喜んでほしかっただけだった。そしてその純粋な気持ちと犬に似た姿は大きな勝利を呼び起こした。
後宮ではいまだ誰にも見せなかったマリアベルの全開の笑顔。
だが、それは大きすぎる勝利だった。
その笑顔を遠くから見たレナスの嫉妬はとどまることをしらない。もはや言葉が通じる状態ではない。
「星獣が主人を裏切った罪、死をもって償うがいい。」
完全に戦闘モードに入ったレナス、両手に巨大な魔力が膨れ上がる。
「あの…、レナスさま…、話を聞いてくだされ…。」
ベルスキーは涙目になって死を覚悟した。何が悪かったかはわからない。だが、敬愛する主人に今日、この場所殺されそうなことは間違いなかった。
「ベルスキーさーん！ベルスキーさーん！」
その時、てってとマリアベルが再びこちらに走ってくる足音がした。
瞬時に、レナスの放つプレッシャーが消える。
「あ、レナスさまとまだお話してたんだ。」
まだマリアベルが離れてから5分ほどしかたってないはずだが、楽しみなことを控えた子供のように時間間隔がくるってるのだろう。マリアベルはすぐにレナスたちのもとへ戻ってきてしまった。
「ごめんなさい。」
一言謝ると、マリアベルはまた去って行った。
ゴゴゴゴゴゴォ
一瞬でレナスに闘牙が戻り、無言で手刀を構えベルスキーに近づ

く。
「だから、誤解ですから…。落ち着いて…。」
じりじりと後ろに後退するベルスキー。またベルスキーに命の危険が迫る。
「ベルスキーさーん！」
再び、マリアベルの声が聞こえた。
闘牙が消える。
「ボールが見つかったんです。ボール！」
戻ってきたマリアベルはさらにテンションが上がっていた。手には握りこぶし大の丸い球がにぎられている。
そしてまだレナスとベルスキーがいるのを見てしょんぼりした。
「ごめんなさい、レナスさま。」
「いえ、いいのよ。」
すぐに笑顔を張り付けてマリアに答えるレナス。
「ベルスキーさん、レナスさまと話が終わったらボールで遊びませんか？」
「え、ええっと。」
ベルスキーは答えに詰まる。確実にそれを受けては、自分の寿命はレッドゾーンに突入する。いや、もうすでに半ばつきかけているのだが。
「やっぱりボール遊びみたいなのはしませんか。ベルスキーさんかしこいですもんね。」
「いえ、そういうわけではないのですが。」
ベルスキーは戸惑うように、レナスを見上げた。
それを見て、マリアベルもレナスの方を見る。そしてレナスこそがベルスキーの主人だったことを思い出す。
「レナスさま、私、昔から犬とボール遊びするのが夢だったんです。レナスさまからもベルスキーさんにお願いしてくれませんか？」
普段は見ないマリアベルの上目使い。その威力はレナスにとって絶大だった。

「やりなさい、ベルスキー。」
「は、はい…。」
大丈夫なのだろうか。と思いつつもベルスキーは主人の命令に承諾する。
「わぁ、ありがとうございます！レナスさまぁ！」
マリアはレナスの手をぎゅっと握り、花がほころぶような笑顔を見せた。それは初めて自分に向けられた満面の笑み。レナスは顔を真っ赤に染め何もいえなくなってしまう。
マリアはマイペースに硬直させたレナスの手を離し、ベルスキーの方を向き直り笑顔で言った。
「それじゃあ後で遊びましょうね。」
「わ、わかりました。」
「絶対ですよ？」
「は、はい。」
「レナスさまからもお願いしますね。」
「え、ええ。」
そう言ってマリアベルは本当に去って行った。
その後、ベルスキーの処分は一時保留になり、なんとか命の危機を脱することができた。

＊＊＊

私はベルスキー。レナスさまに仕える誇り高き星獣である。
幼いころより、レナスさまと共にあり、その身を支えてきた。レナスさまの一番の側近であると自負している。
私が何よりも誇りにしているのは、レナスさまへの忠誠心だ。レナスさまのためなら命を投げ出しても惜しくない。陳腐な言葉だが、本当にそう思える。
レナスさまを守り支えるためにこそ私は生まれてきたのだから。
だが…。

「ベルスキーさーん、くっきーたべます？」
「は、はい。」
「ほら、あーん！」
レナスさまが愛する女性が、手にくっきーをもって差し出してくる。私は、それを口に入れる。
「マリアは本当にベルスキーのことが大好きね。」
レナスさまは今日も笑顔を張り付けてその景色を見つめる。
「はい、大好きです。」
そう言って女性が私に抱き着いたのを見て、レナスさまの瞳に殺意が灯るのが見えた。
「明日もベルスキーさんを連れてきてくれます？」
「ええ、いいわよ。マリアが望むならいつだって。」
あれから、レナスさまはマリアさまの点数を稼ぐために私を利用することにしたらしい。しかし、理性ではそう判断しても感情は納得できていないらしい。
二人っきりになると死なない程度に魔法が飛んでくるようになった。
そして私とマリアさまが仲良くすると（というよりマリアさまが一生懸命私を構い倒そうすると）すさまじい殺意と嫉妬が籠った視線が飛んでくる。
私の胃はキリキリと痛みを訴えるようになっていた。最近、毛並みも悪くなってきた気がする。
私は星獣だ。
レナスさまのためなら命を投げ出すことも恐れない。
だが、主人に女性関係の嫉妬で殺されるのと、精神的なストレスで病気になって死ぬ未来はとても受け入れがたいものに思えた…。

7羽

クオンさまとレナスさまは遠国の式典に呼ばれて留守になっていた。

というわけで、私はもっぱら読書三昧だったのだが。なんだかんだでいないと少しさびしく感じるあたり、お二方に毒されているのだろうか。

「お茶会ですか？」

「はい、そうです。」

逆に何故残ってるのか問い詰めたくはないけど、神様にはひっそりいなくなるようにお願いしておきたいランキング一位のカルーアだけは残っていた。時に穏やかに微笑んでるように細目には、油断ならない胡散臭い表情を浮かべている。

「若い貴族の令嬢方からのお誘いでしてね。いい加減断るのが面倒…部屋にこもられっきりのマリアさまの良い息抜きになるのではないでしょうかと思いまして。クオンさまとレナスさまがいない隙にさっさと行ってもらえると助かるんですけどねぇ。」

「絶対わざと本音を漏らしてるでしょ！しかも最後の文章、まるっきり本音の方とつながってるし！」

そうお茶会などに参加して息抜きになるわけがない。そもそも私は本を読むのが一番の息抜きなのだがそれは置いておくとして。

だって、私のこの国での評判は…。

「はっはっは、いくら漆黒の女狐とよばれるマリアさまでも命までとられたりはしませんよ。」

そうなのである…。クオンさまとレナスさまが毎日後宮に入り浸るせいで、この国ではひとつの噂が流れていた。

国王を誘惑して後宮に誘い込もうとする悪女と、それに心を痛めながらも健気にも心配して後宮へ足を入れる王妃。

実際はクオンさまとレナスさまは殺し合いをしていたわけだけど。

私は世界の行く末が心配で心が痛かった…。
まあ、それは慣れたからいい。誰がどう言おうともう慣れた…。
ついでに後宮もすこぶる評判が悪い。なるべく出来るだけ、豪華にならないようにしてもらったんだけど、それでも凄い金額がかかっている。あまりに高級すぎて落ち着かないので、私が寝食してるのは庭に建ててもらった地味な一軒家である。
そんなわけで私の悪評はもっぱら拡大中。国民の皆様の前にでたら五体満足で返していただけるか若干、多分に不安な状況なのである。
「えええ…やだなぁー…。」
そりゃ命までは取られないだろうけど…。それに今読んでる本がいいとこなのだ。
「ご参加いただけますか！ありがとうございます！それでは私は政務があるので失礼します！」
「ちょっとまてぇぇぇい！だれがそんな返事したあああ！」
私の返答内容など完全無視して、カルーアは快い返事をもらったかのように笑顔で言い切り去って行った。
あとに残されたのは見た目は綺麗な便箋にしたためられた、一通の招待状だった…。

＊＊＊

ひゅるるー。
まだ春でお茶会日和の庭には暖かい日差しが降り注いでいるはずなのに、そんな寒風吹きすさぶ音が聞こえる気がする。
目の前にいる貴族のご令嬢方はこちらを見てひそひそと話しこんでいる。呼び出したのはあちら側なのだが、よくこの場にこれたなという感じだ。
行くつもりが無かったのに、寝ているうちにドレスを着せられカルーアに転移魔法で後宮の外に放り出された私としては身に染みる

思いだ。
「あのぉ…。」
そう声をかけたら、話し込んでいた一部の少女たちがびくりっと震えた。ガタリと椅子が揺れる音がする。いや、私は悪魔か猛獣か珍獣か何かなのでしょうか。生まれも育ちもこれからも善良な一市民なのだが。
巷で流れるあらゆる噂は誤解なのだ。別にクオンさまをたぶらかしてなどいな…いないこともないが、それは私が悪いわけではなく、レナスさまを泣かせ…夢中で本を読んでたら相当無視していたらしく一度本気で泣かれたがちゃんと謝った。
勝手に座っていいものか迷っていると、3人の少女が立ち上がり私の前にきた。
「ごきげんよう。マリアベルさまでいらっしゃいますか。」
真ん中に立つのは鮮やかな金髪に勝気な朱色の瞳を持った少女。こちらを恐れるように少女たちとは違い、その笑みには幾分かの余裕がある。しかし、その瞳は笑って無く、まぎれもない敵意が宿っている。声音にもいくぶんか嫌味な調子が混ざっているが、貴族の中の貴族といった感じのこの少女にはそれもよく似合っている。
たぶんこの集りのリーダー格の少女なのだろう。
その後ろに控える少女たちも彼女よりは地味だが、綺麗な外見をしていて、同じような雰囲気を纏っている。
「はい、そうですけど。」
一方、田舎貴族出身の貴族の端っこに住む私は、なんとも気のない返事しかしようがない。
「よくぞこられましたわね。その勇気に賞賛いたしますわ。」
「はぁ、どうも。」
私が噂通りの女狐なら嫌味の応酬でも華々しく繰り広げるところだが、そんなわけないのでそんなことにもならない。
「ところでお名前をおしえて頂きませんか。まだご紹介いただけてないので…。」

私が尋ねると少女たちははっと気づいた様子で顔を真っ赤にした。単純に名前を知らないから聞いただけなのだが、どうやら自己紹介を忘れていたらしい。そしてそれを失態と感じたみたいだ。強気な表情が一瞬崩れかけたが、慌てて取り繕う。

と共にこちらへの警戒心が一層増したようだ…。

いえ…悪気はなかったんです…。ごめんなさい…。

「失礼しましたわ。私はベルマ公爵の娘、バリエールと申します。」

公爵令嬢か～。どおりで貫録があるわけだ。

「私はシール侯爵の娘、ジェシカよ。」

亜麻色の長い髪を持つ背の高い少女が名乗る。

「私はミナス伯爵の娘、セレナ。」

鮮やかな青い髪をしたショートカットの女の子。ミナス伯爵といえば、高位の神職をいただく貴族でその地位は下手な上位貴族より高かったはずだ。

バリエールさまたちはこちらをビシッと強い眼力で見てくるのだけど…なんというか…そんなにがんばられても…リアクションに困る…。

「えっとぉ…、よろしくお願いします。」

とりあえず、ぺこりと頭を下げるぐらいしかできませんよ。

＊＊＊

しーん…。

お茶会の席は初っ端から、沈黙に包まれていた。こちらに対してビシビシと痛いほどの敵意が伝わってくる。

「お茶がはいりました。」

カタッと侍女さんが私の前にティーカップを置いてくれる。

「ありがとうございます。」

私はお礼を言って侍女さんの顔をふと見た瞬間、お茶を拭きだした。

「ぶほっ、ごほっ、ごほっ。」
何故ならその侍女は、英雄の一人ルシアさんだったからだ。ちなみにルシアさんは男だ。やたら女装が似合っているけど。
「な、なんでルシアさんがこんなとこにいるんですか。しかもその恰好はいったい…。」
私は背中を撫でてくれるルシアさんに小声で話しかける。
王宮のお茶会ということで、配膳は王宮の侍女がやるはずだった。だからエルダさんたちはこの場にいない。何人か連れてきていいと言われたが断った。
逆にその方が厄介になりそうだったから…。
だというのに、何故王宮の侍女に紛れ込んでルシアさんがいる。
「もしものときはやれと言われました。」
ルシアさんはいつも通りの平坦な声で、それだけ呟くとテーブルのお茶を拭いていく。
やれ？やれってなんだ！？
あ、そうか～。侍女をやれってことか～。
ってそんなわけない！
今ここでルシアさんが侍女をしなければいけない理由がゼロである。というか、ニュアンス的に明らかにやばいタイプの「やれ」だ。
たらりと頬から汗がひと筋流れ落ちる。お嬢さん方のほうを見ると、こちらの出方をまだうかがっているようだ。何か仕掛けてくる気配はない。
なんとか…このお茶会を無事にすまさなければ…。王宮の庭に作られたお茶会の会場で脇に控えて並ぶ侍女さんたち、その中でこちらを感情の読めない、しかし隙のない瞳でじっとみているルシアさんを見て私はそう決意する…。
＊＊＊
とりあえずお茶会に私を読んだということは、何か嫌がらせの手

段を用意しているはずだ。
それを避ける術を考えるのもいいが、まずは人間関係の基本、友好を築いてみよう。そう大切なのは話し合い。人間話し合えば分かり合える。そうすれば、問題も解決どころか、肩身が狭い思いもしなくなって一挙両得！
「今日はいい天気ですね。」
しかし、出てきたのはなんとも気のきかない言い回し…。本ばっかり読んでお茶会なんてろくに参加したこと無い私に、お茶会で気の利いたことを言うスキルなどなかった…。
「あなたの目は節穴なの？どう見ても曇りですわ。」
帰ってくる言葉もそっけない。うわぁ、確かに曇りだ。雨天中止とかならないかなぁ。
「このお茶美味しいですね。」
だが、まだあきらめずに食い下がる。人間って分かり合える生き物だよね、きっと。
「あら、田舎貴族出身あなたにお茶の味がわかるんですの？」
実は最近クオンさま、レナスさまと一緒に暮らしたせいで舌が肥えてしまった。香りは最高級のものだとはわかるが、それほど感動するほど美味しいとは感じなくなった。
それはまあ置いておくとして、返しのつっけんどんさが半端ない。どうやら友好を築くのはむずかしそうだった。うん、わかっていたけどね…。
仕方ない…。相手の罠に気を付けよう…。そうしないと、その相手の身が危険な感じがする。さっきまでの私たちのやりとりに、きらーんと何故か目を輝かせているルシアさんに溜息をつく。
さて、どういう風に来るだろうか。
バリエールさんたちを観察していると、相手もどうやら準備ができたらしい。にやりと笑ってこちらを見た。
「今日はジェシカが寵姫さまへ、プレゼントを用意したというんです。」

「はい、お近づきのしるしに受け取っていただきたいのですが。」
プレゼント…。いやな予感しかしないんだが…。
「はあ、どんなものでしょう。」
無下に断るのも申し訳なく、一応尋ね返してみる。
「これですわ。」
侍女から何やら箱を受け取り、ジェシカさんはテーブルの上に置く。
彼女の手で蓋が開けられるとグエグエッと不気味な声をあげる大きな魚。ぱくぱくと口を開けて、濁った白い瞳がジェシカさんの方を向いている。
これは…、エビポアラという魚だ。
大変珍しい魚だが、とっても醜悪な外見の上、陸地でも奇妙な声をあげるのでいまいち食用としては人気がない。
「さあ、どうぞ。」
自分で蓋をあけてみたもののその外見に衝撃を衝撃をうけたらしい、ジェシカさんも引きつった顔でそれを私の方にずずずと出そうとする。しかし、エビポアラの白い瞳は相変わらずジェシカさんを見つめている。
「あの…、食べなくて大丈夫ですか？」
「えっ、これ食べられるの？」
嫌がらせのつもりで渡してきたので食べれるとも思ってなかったらしい。というか、食用以外でプレゼントされる魚っていったい。魚がプレゼントされる時点でおかしいけど。
それよりも、今は大きな問題があった。
「はやくそれ食べた方がいいですよ。」
私はエビポアラを指差してジェシカさんに遠慮がちに告げる。
グエグエっという声はだんだんと小さくなり、白い瞳はより一層ジェシカさんを見つめている。
「な、なんで私が食べなきゃいけませんの！こんなもの！」
いえ、あなたが用意したプレゼントですし。ってそうでは無くて。

「その魚、食べないと呪われちゃいますよ。」
そう、エビポワラは不気味で食用としては人気が無い魚のだが、一度釣り上げたら絶対食べなければいけないのだ。彼らは大自然に暮らす動物たちの真理か心理か、食べられなかったことを逆恨みし、その相手に呪いをかける。
普通、呪われるのは釣り人なのだが、どうやらうまく逃れたらしい。
「ななな、どういうことですの！？」
「いえ、だってロックオンされてますし。」
白い眼はぎょぎょっとジェシカさんのことを見つめている。どうやら蓋をあけた拍子にロックオンされてしまったらしい。
このロックオンというのは、エビポワラの濁った瞳で見つめられていることで、何故か瞳孔もないのにどこを睨んでいるのかわかる。そしてロックオンされた相手は、エビポワラの鳴き声が消えてる前に、それを食べなければいけない。
大抵、生である…。
グエグエッということえは、だんだん小さくなっていっている。
「わけのわからないことを言って私を脅す気？」
甲高く叫ぶ彼女に、持ち歩いているミニ辞典を渡してあげる。
「ほら、ここ。」
本を両手で受け取り、目を上下にすべらした彼女は、テーブルの上に置いた魚に目を向け「ひぃっ」と短く悲鳴をあげた。ロックオンされている状況を理解したらしい。
お茶会のメンバーたちも、侍女さんたちも（ルシアさん以外は）おろおろと騒ぎ出す。ジェシカさんは青い顔をしてがくがくと震えだす。
「あのぉ、とりあえずさばきましょうか？」
刺身にすれば多少はましになるかもしれないし。多少はだが…。
一応こう見えても、田舎貴族、魚をさばくぐらいならできる。
「いやよ！こんなもの食べられないわ！」

しかしジェシカさんはヒステリックに叫んで拒否する。侍女さんたちが、なんとか一口だけでもと言いくるめようとしても聞く耳をもたない。
そのうち、グエグエという声が小さくなり、そして止まった…。
しーん…。
お茶会にまた不気味な沈黙が訪れる。
それを破ったのは。
「くしゅんっ。」
ジェシカさんのくしゃみだった。
「あれ、これはくしゅんっ！なんでくしゅんっ！くしゃみがとまらっ」
ジェシカさんは凄い勢いでくしゃみをする。
「これは…花粉症の呪い…。」
花と暮らし、花と生きる女性貴族たちに恐れられるもっとも恐ろしい呪いだ…。
「そんなっ、私がかふんしょ、くしゅんっ、ぶえっ。」
王宮も花壇や薔薇やら花にあふれている。ジェシカさんのくしゃみはどんどんひどくなっていく。鼻水ずるずるで、さっきまでの美しい貴族の少女の面影はない。
やがてくしゃみと涙でしゃべることすらままならなくなっていく。
「こっくしゅん、こんなっくしゅん。」
それでもまだお茶会に留まろうとしたジェシカさんの腕を掴んだものがいた。
「あなたの敗北ですよ、ジェシカさま。敗者は退場あるのみ。」
ルシアさんだ。
ってなにやってんの！？なにいっちゃってんの！？
そのまま花粉症になったジェシカさんは、ずるずるとお城の中にひきずられていった。その様子をあっけにとられて見つめていた私に、不穏な呟きが耳にはいる。
「よくもジェシカを、許しませんわ…。」

バリエールさんだ…。
私がわるいのか！？仲間を失った二人は、どこか悲壮な顔で私を睨んでくる。
「ジェシカの用意した罠を、そのまま返してしまうなんて、やはり漆黒の女狐。」
誤解である…。断じて誤解である！
いつの間にかお茶会には、以前よりも凄い緊張感が漂っていた。
ああ…、世界に平和はいつ訪れるのだろうか…。私は平和を望んだ偉人たちの顔を想いだし、天に祈った。

8羽

「前回までのあらすじ。
お茶会、それは貴族に生まれた女たちの闘技場(コロシアム)。
優雅に揺れる白いテーブルクロスの下、飛び散るのは互いの赤い血しぶき。小鳥のような声で交わされるのは、研ぎ澄まされた言葉の剣(つるぎ)。
そこに託されるのは、貴族にとって命より重い名誉。
世界で最も絢爛なる舞台で行われる、高貴なる女たちの知略、策謀、権力、全てを尽くす、苛烈で華やかなる戦い。
その戦いの果てに待つのは、栄光か、もしくは失墜か。
天に近しき国と呼ばれるこのアマテリア。そこでも今、激しい戦いが行われている。
運命の舞台に選ばれたのは、美しき花が咲き誇る王城の庭園。争うは深遠なる闇の噂に包まれた謎の女、黒髪の女狐、対するはこの国でも有数の権力を持つ貴族の令嬢たち。
先手を取った令嬢たちは、贈り物というなの毒を仕込んだ剣を女狐へと振りかざした。しかし、なんということだろう。しかし女狐はいとも簡単にそれを跳ね返し、刃は令嬢たちのほうに突き立った。
脱落する彼女たちの一角たる少女。令嬢たちに戦慄が走る。
だが、その瞳に諦めの色はない。相手の力を見せつけられたとしても、己の力量を信じ戦う決意を新たにする。
一方、漆黒の女狐は、少女たちをあざ笑うかのように、平静な態度を見せつける。
そう、戦いはまだ始まったばかりなのである。
麗らかなる日差しの降り注ぐ午後。赤、橙、黄、緑、青、藍、紫、七色の花びらがたおやかに舞う庭園の中心。
王宮史に書き加えられ、のちに残されるであろう闘い。それは今はじまったばかりだ。」

「ていっ。」
そんな長(なが)ぜりふを、ほとんど無呼吸で言い切ったルシアさんの頭をちょっぷで叩く。
「痛いです。何をするんですか、マリアさま。」
「それはこっちのセリフです！何で変な煽り入れてるんですか！」
いつもの無表情な顔のまま、長い、長い、本当に長い台詞をどこかにむかってしゃべりだしたルシアさん。相変わらずのメイド姿で、すごく似合ってるのが腹が立つ。
「せっかくマリアさまがお茶会に参加されているのですから、盛り上げようと思って。」
「変な方向に盛り上げなくていいですから！」
「それは残念なことです。」
「ぜんぜん残念なことじゃないです。」
そう、私はこのお茶会を穏便に、平和に、できれば和やかに終えたいだけで、戦いにきたわけではないのだ。なぜか、ひとりの女の子が酷い目にあってしまったが、あれも全然わたし意図したことではないし、私の責任ではないはずである。
「いいですか、私は貴族のご令嬢の方々となごやかにお茶会しに来たんです。お願いですから、余計なことはしないでください。」
私はルシアさんに、真剣な顔で言い聞かせる。ルシアさんの表情は、真剣だが、いつもこの真剣な顔でボケ倒すのでまったく信用できない。
「そうだったのですか。わかりました。」
どうやらわかってくれたらしい。私はルシアさんの返事にほっと一息つく。
「それでは肝心の第2ラウンドのルールを決めさせていただきましょう。」
「なにひとつわかってなあああああい！」
右手を振りかぶりツッコミをいれようとするが、白羽どりされる。
あっ、このっ、小賢しい！

「いいわ、私たちが先手を貰ったもの。今度はあなたに決めさせてあげる。」
私とルシアさんがツッコミとツッコミ回避の攻防を繰り広げていると、バリエールさんが腕を組み勝気な瞳でこちらを睨んで言ってきた。
え、いや、それはなんか違うんじゃないですかね…。あれ、少なくとも、建前上はお茶会ではなかったろうか。お茶会に先手も後手も存在しないはずなんだけど…。
「いや、そういうのはちょっとやめませんか…。」
あくまで平和で穏便な普通のお茶会をしたい、と私が提案しようとすると。
「マリアさまはそちらが決めても余裕で構わないとおっしゃられてます。」
「私だって譲ったのよ。決めるつもりはないわ。」
「では、私に決めさせていただきましょう。」
「ちょっとまてーい！」
流れるようにルシアさんが会話を別方向に誘導した。
なんで、この人はあああ！
「舞台はすでにこちらで用意させていただきました。ご存分に戦いください！」
パチンッと指をならすと、転送魔法が発動する。その場にいる全員の足元に、光り輝く青い魔法陣が表われる。
あたりの景色が揺らいでいく中、私は叫んだ。
「あんたぜったいわざとでしょおおおおおお！」

＊＊＊

転送魔法で送られた先は、何やら岩でかこまれた洞窟だった。
「ここってどこ…？」
「ここはクオンさまとレナスさまが攻略されたダンジョンのひとつ。

この空間は、その最奥です。」
隣りに飛んできたルシアさんがいつも通りの無表情で言う。
私はその言葉を聞いてダンジョンを見回した。洞窟の中なわけだが、どういうわけかそれほど暗くなく、壁などを視認するのには支障がない。洞窟はちょうど、王宮のひと部屋ぐらいの広さで、ドーム状になっている。
中央には何故か岩をけずって作られた肘かけ付きの椅子があり、その前には同じく岩を削ってつくられたと思われる大きな机。机には展開式の魔術がほどこされているらしく、ルーンが刻まれている。
何のためにあるのかわからない部屋だ。
「あれ？バリエールさんたちは？」
そう言えば、一緒に転送されたはずのバリエールさんたちが部屋にはいない。
私がそう言うと、机に刻まれたルーンが光り輝き、目の前の空間に映像が投影される。それは洞窟の別の場所で、固まって歩いているバリエールさんたちの姿だった。
「なにこれ？」
「ルールは簡単です。バリエールさんたち令嬢方にはいまからこのダンジョンを攻略して貰います。そしてマリアさまはそれを妨害します。もし、この最奥の部屋にたどり着けたら、バリエールさんの勝ち。途中で力尽きればマリアさまの勝ちです。」
「お茶会やってたはずがなんでこんなことに…。」
何度突っ込んでもマイペースで説明を続けるルシアさんに、とてつもない徒労感がこみ上げてくる。
「もちろんお茶会の続きなので、両軍には最高級のジンジャーティーを準備させて頂きました。」
そう言って隣におかれる湯気のたったお茶。バリエールさんのほうにも、お茶のワゴンが置かれている。黒い岩肌におかれた不気味な洞窟に、花柄模様のお茶の入ったワゴン。ものすごくシュールだった。

「というか、ダンジョンってものすごく危ないじゃないですか！」
危うくルシアさんの適当な雰囲気に流されかけていたが、ダンジョンにはモンスターやら危険な動物がたくさんいる。お茶会の嫌がらせですむレベルをはるかにこえてしまっている。
「大丈夫です。クオンさまとレナスさまが攻略されたダンジョンは、生態系ごと根こそぎ消滅させられることがほとんどなので、むしろ家の中の方がねずみにかまれて危ないクラスの安全度を誇るようになります。」
「なんかもうクオンさまとレナスさまと暮らすようになってから、モンスターの方が可哀想になってきた…。」
とりあえず安全なようでほっとした。
「ですが、それではマリアさまがいささかふり！そこで今回は助っ人を用意させて頂きました！」
そういってもう一度、ルシアさんが指をぱちんと鳴らす。
部屋の中に赤い魔法陣が生じ、出てきたのはなんと悪魔たち。
「でえええええ！何よんじゃってるんですかあああ！」
炎の羽を持つ赤い巨人、首なしの鎧騎士、高位のアンデッド、サキュバス、悪魔の中でもかなりの上位に位置するものたちが一斉に部屋の中に出現する。
一瞬、死を覚悟したが、悪魔たちは微動だにしない。
いや、よく見ると、青い顔をして固まったままぷるぷると震えている。
そしてその中でも特に立派な角を持った黒い悪魔が、恐る恐ると言った感じで前にでてか細い声でルシアに話しかける。
「こ、今回はいったいどういうご用件でしょうか。ルシアさま…。」
「ご安心ください、マリアさま。ここにいるのは、クオンさまとレナスさまに絶対に逆らわないと誓うかわりに、消滅を免れた悪魔たちです。」
「は、はあ…。」
悪魔たちは人間を見下し、ひたすら無慈悲に高慢にふるまう化け

物たちだったはず。そんな悪魔たちがいるとは初めて聞いた…。
でも、目の前の高位の悪魔たちは、部屋のすみで借りてきた兎のように震えている。ルシアさんの話は、信じがたいが本当としか思えなかった。
「それでなんで悪魔の人たちを呼び出したんですか。」
「それはもちろん。この悪魔たちにマリアさまの手ごまになって、バリエールさまたちを撃退してもらうためです。」
「いやいやいや、そんなのいりませんから！必要ないですから！」
悪魔をけしかけるなんて洒落にならない。第一、負けても全然かまわない勝負なのだ。このまま素通りしてここに来てもらうに限る。その後に、説得でも交渉でもして平和にお茶会を終えたい。
それが最良の選択だ。そう思ったのだが。
ドクンッ
何故だが嫌な感覚が頭にはしった。その感覚をおって、その先に視線を向けると、涙目で部屋のすみで震える悪魔たちがいた。その悪魔たちは、必死の形相で無言で何かを訴えかけている。何か…、まるで私に助けを求めているような…。
「そうですか。必要ないですか。では、邪魔ですし消してしまいましょうか。」
消す。その台詞が聞こえた瞬間、悪魔の人たちが何故か涙を浮かべ、洞窟で見えない空を仰ぎ始めた、ある悪魔なんて何故かお祈りの格好で何かを必死に念じている、無言で遺書らしきものを書き始めた悪魔までいた。
そして黒い悪魔が目で何かを必死に訴えいる。必死の表情で何かを…。
これは間違いなく、私が断ったら、この人たち『消される』。
「いえ、やっぱりいります！手伝ってもらいたいです！物凄く必要です！」
私は慌てて撤回の言葉を言った。いくら悪魔たちおはいえ、あまりにあんまりな様子だったから。

「そうですか。それは良かったです。それでは準備も整ったところで、勝負を開始とさせていただきます。」
画面の向こうでバリエールさんたちに合図が送られ、彼女たちがダンジョンに進行を開始する。
そしてこちらでは。
「ありがとうございます！ありがとうございます！」
黒い悪魔の人が、土下座して私に感謝の言葉をのべていた。
「おらぁ、人間界に来てはじめて人のやさしさにふれたんべさぁ。」
首なし騎士が無いはずの首で涙を浮かべ感動している。
「あたし、あたしぃぃ、今度こそだめだと思ったぁぁぁ。うっうっひっく。」
サキュバスの人がマジ泣きしている。
クオンさま、レナスさま、いったいどういう目にこの悪魔たちをあわせたんですか…。
伝説で聞くような威厳のかけらも喪失している悪魔たちに、私は頬から汗を流す。
「マリアさま、何なりとご指示ください。命をたすけてくれた恩義、絶対返して見せます。」
赤い羽根の巨人が言う。
「いや、何もしなくていいですから。出来れば休んでてください。」
悪魔の人に暴れて貰っちゃ困るし。
「休んで！？」
「あたしたちに休んでって！？」
あれ、何かまずかったろうか。
「なんてやさしいひとなんだあああああ！」
「俺は猛烈にかんどうしているううう！」
何故かむせび泣きだす悪魔さんたち。いや、悪魔ってやさしさとか思いやりとかそう言う概念と対極にいる人たちではなかったか？
「そうじゃ、みなのもの！せっかくご指示をいただくのじゃ。この方に新たな『魔王』さまになっていただくのはどうじゃろう！」

そう考えている間に、高位アンデットの人が何か言い始めた。
「おお、なんというグッドアイディア。先代の魔王はクオンさまとレナスさまに撲殺されたし、我らにも新たな王が必要だった。」
「あたしも！あたしもさんせーい！」
「おらもこんな優しい方なら王になってもらいたいべ。」
え、ちょっと…。
「そんなの私にはむりですから！」
そう言って断ろうとしたが、黒い悪魔の人が真剣な表情で涙を浮かべすがりついてくる。
「お願いします、マリアさま。我らが新たなる王になってください。クオンさまとレナスさまに捕まってからというものの、心安らぐ日々が無いんです。我らを助けると思って、是と言ってください！お願いします！」
その眼は何かに怯える子羊のようで、私は断りきれなかった。
「ありがとう！ありがとうー！」
「やったー！新生魔王さまの誕生だー！」
「おら魔王さまのためにがんばんべー！」
「みんなで魔王さまのために勝利をもぎとるぞ！」
「おー！」
５人の悪魔たちは私を魔王に就任させると、私の話も聞かずに、はりきって部屋を出て戦いに向かったのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0324o/

寵姫のおしごと

2011年10月12日14時52分発行